
たっポン！

ネギタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たっポン！

【Nコード】

N5251V

【作者名】

ネギタロー

【あらすじ】

卓球が好きなくせに、過去の事件を引きずって高校に入学しても帰宅部のユウヤだったが、バカな友人からの誘いもあり、再び卓球をすることに。卓球を通して成長するユウヤたちの、ふざけっぱなしの青春物語。

その1

体育館二階の卓球場に上がると、ピンポン球の軽い打球音が響いていた。

「足動かせ、ペース持つてかれるな！」

「はいっ」

「もっとアクティブに動けっ！」

アヤが入部してすぐコーチにしごかれているのを見て、なんだか自分が置いてかれた気がした。実際、アヤがこうして先輩に気を遣いながら球を打っている中、オレはそれを覗いているだけ。バスケットの見学をしたけど、オレには合いそうもないし。誰にも見つからないように、そっと一階に下りた。

一階の隅のパイプ椅子に座る友人に声をかける。

「オレ帰るわ」

「え、バスケットは？」

「入んね」

「あゝ、ユウヤは背が低いからな」

「うっさい」

嫌味を吐く友人を置いて、一人校門を抜ける、鞆の中に卓球ラケットを入れたまま。入る気もなかったけどさ……。

男子卓球部、なくなっただけじゃん。

桜の木が緑の葉を付け、朝陽をさんと浴びている。天気になって、オレはもやもやを抱えたまま登校していた。

「おーす！」

「おう、ハジメか」

昨日一緒に部活見学をした戸田初だった。

「なんだよ、ぶすーとして」

ハジメに言われて、自分が不機嫌な顔をしていることに気づいた。

「いや、別に……」

「ふーん、そうか。なあユウヤ」

「ん？」

「一緒に卓球部創ろうぜ！」

「……はあ？」

それは唐突な誘いだっただ。

「いや、部の前に同好会だし。てかお前、バスケ部入るって言うてたじゃんか。なんだよ急に？」

「え？ えーと、昨日部活見学しに行ったじゃん？ そんな時に体育館二階の卓球場見てたろ、お前。いやー、実はおれも前から興味あったさー」

「いや見てないから」

「まあ初心者だけどおれ運動神経いいし、それにユウヤは元卓球部だったよな？」

「中二ん時に辞めた」

下駄箱で上履きに履き替えながら、ハジメが話を続ける。

「ほら経験者じゃん、やるっきゃないって」

「帰宅部でいい」

「一人確保つと。あとは誰がいいかなー？」

「おい無視すんなって」

廊下を歩きながら、ハジメが別のターゲットを見つけた。

「あ、山下君！ 部活もう決めた？」

クラスメイトに駆け寄るハジメ。勝手に話を進めそうなので阻止しようとしてハジメのあとを追う。

「卓球同好会創ろうとしててさ、今オレとユウヤがいるんだけど。」

山下君、卓球やってたよね？」

ハジメの背後のオレに目を合わせ、山下君は気まずそうな顔をした、はつきりと。

「ごめん、もう他のところ入っちゃったんだ」
そう言って、足早に去ってしまった。

「……オレはやらないからな」

そう言い残して、さっさと教室へ向かう。

「えー、なんで？」

ハジメがオレを追いかける。しつこい。

「もう卓球やりたくねえんだよ。それにオレがいると本当に誰も集まんねえぞ？」

「なんで？」

「嫌われてんだよ、卓球やってた奴らに」

「意味わかんないって」

「お前さ」

話の途中、誰かにぶつかった。謝ろうと相手の顔を見る。アヤだった。

「あ、ごめん……」

目も合わせず早口で言った。知り合いなのに驚くほどオレ無愛想。アヤも一言、ごめんとだけ言って通り過ぎていった。

ハジメの方に向き直る。

「とにかくオレはやる気ねーから、他の奴……おい、ハジメ？」

遠のくアヤの背中を見続けるハジメ。こいつ、口が半開きになっ
てる……。

「お前、もしかしてアヤ目当てで卓球」

「てめえあの子とどういう関係だ？ 紹介しろ！」

ハジメの凄みに少し後ずさりしてしまった。

「えっ？ いや、家が近所で小、中が同じ学校だっただけで……て
かやっぱアヤ狙いかよ！」

「一緒に卓球がんばろうぜ！」

ハジメが力強く親指を立てた。

「やるわけねーだろ」

「……じゃあさ」

ハジメがしおらしくなって言葉をゆつくりとつなげる。らしくない。あつ、今こいつ本気なんだ。

「今日の放課後、職員室に顔だけでも出してくんない？ 昨日、卓球部創るって担任に言ったら顧問してやるから来いって言われたんだ。一人しかいないのに同好会も何もないじゃん？ 顧問まで見つからなかったら本当に諦めるしかないし」

その1（後書き）

初投稿です、よろしくお願ひします。じゃがりこ大好きです、よろしくお願ひします。

その2

放課後、ハジメと一緒に職員室へ向かうと、職員室前に見慣れない生徒が一人立っていた。上履きの色からしてオレらと同じ一年生だ。ハジメが話しかけた。

「君、もしかして卓球部に入りに？」

「はい！ えと、戸田さんですか？」

職員室前のやりとりで一人置いてけぼりをくらう。

「ハジメ、誰？」

「あ、ぼく、まきのけい牧野敬といいます。ポスターを見て来ました」

「ポスター？」

「そそ、これこれ」

ハジメは自慢げに鞆から男子卓球部員募集の旨を書いたポスターを出した。

「お前っ、創れるかどうかも分かんないのにそんなの貼ったのか？」

「創るつつってんだろー」

「てか何だお前の行動力、どんだけアヤのこと好きなんだよ！」

「いや、そんなんじゃないやねえって」

「牧野君、オレはただの付き添いだから。あとは二人で頑張って」

二人に背を向け、廊下を歩き出した。

「ユウヤ、お前だつて卓球やりたいんじゃないやねえのかよ？」

「全然」

振り返らずに階段を下りた。

風が冷たい。バスはまだ来ない。学生たちが長蛇の列をつくってバスを待つ。面倒事を避け、周りと同じような生活をする。風は冷たいけど、そうすれば強い風当たりを受けることもない。これでいいんだ。

もう、卓球することないのかな……………？

もう、アヤと話すことも、ないのかな……………？

バスが見えた。それと同時に、携帯電話がメールの受信を知らせた。

ため息を一つつき、次には列を抜け、学校へと歩き出した。

ハジメからのメール。

『助けて！』

ハジメからの指示で体育館二階の卓球場へと向かう。体育館に入るとカコン、カコンとピンポン球を打つ音が単発的に聞こえた。どうなってるんだ？

階段を上ると、一台の卓球台を多数の女子が囲み、その中に間を空けて牧野君が立っていた。状況が呑み込めない。牧野君に声をかける。

「あつ、さっきの」

「橋本優弥だ。どうなってるの？」

「それが、先生と男子卓球部の話をしようと職員室に入ろうとしたら、女子卓球部の人達に呼び止められて、その、妨害されて……………」

「それで、卓球で勝負？」

「はい、先に一セット取ったら認めてやるって。でも見てられない程差があつて……………」

台に目を向けると、ハジメがぎこちなく構えている。向かいに立つのは、またもやアヤだった。しかもかなり力の入りようだ。初心者じゃ反応できない速さのサーブを、バックやミドルの奥深くに突き刺す。ハジメは当然レシーブもできずに、一発で終わる。卓球は頭脳戦と言うが、それ以前に技術の差がありすぎる。

「アヤちゃん、どんどんやっちゃってー」

「……………はい」

「相手よわっ」

逆転劇もなく、ハジメは負けた。

「ユウヤ、助けてくれー！」

……ヒソヒソ……ねえねえ……次どうする？……今来た奴で最後にしようよ……もう一人の子かわいいよね……だよね！……癒し系な……垂れ目だけど顔きれい……ヒソヒソ……。

「コホン。それじゃあ、もう諦めたら？」

「ユウヤ」

女子卓球部もハジメもオレを見てきて、さてどうしたものか。アヤに勝てんのか？ てか、なんでオレが？

「じゃあ、次はぼくが！」

牧野君が意を決して名乗り出た。

「『ダメッ！』『』『』」

アヤ以外の女子卓球部員が声を合わせて牧野君を制止。さっきの試合といい、このプレッシャーのかけ方といい、なんてえげつないんだ。

「オレがやります」

その2（後書き）

若い人向けに書いているつもりなので、口調など、全体が砕けた文
となっています。若者風と考えれば考えるほど分からなくなります。
人はいつから若者ではなくなるのでしょうか？ 過去を顧みるよう
になったらでしょうか？

その3

「ラブオール」

ズボンの裾とYシャツの袖をまくり上げ、動きづらくはあるものの、自前のラケットを鞆に入れっぱなしにしといたことは不幸中の幸いで、試合は始まった。

さつきと変わらない速さでアヤがサーブを打ってくる。でもコースは読めている、即座にレシーブ。アヤは落ちて着いてバックで対応それでも球速が落ちるわけでなく、守るようにならなくてもバックハンド。バックバックバック。こっちはペン、向こうはシェイクハンド。バックでの打ち合いは分が悪い。

またバックへと返ってきた。だがオレはここぞとばかりに回り込んでフォアハンドで返す。若干スマッシュ気味に無理やり押し込んだ。だが間髪入れず、球はオレのコートに返ってきた。ライジングか……！ 自分のコートでバウンドした球を、上昇しきる前に弾き返したんだ。踊らされた。

オレがここまでやるとは思いつかなかったんだろう、その場にした連中がざわめいた。

……ざわざわ……つよ……やつぱり経験者なんだ……勝てるの？
……アヤちゃんかわいい……ざわざわ……。

アヤのサーブは速く、おまけにいくつもの回転を使い分けてくるため、慣れないと翻弄されやすい。けどこいつの手首の動きを、オレは何度も見てきた。左！ もうペース持ってかれねえ！ オレの返球をアヤはバックで返してきた。オレはそれを、今度はバックはバックでも、上回転のバックドライブで思い切り攻め込む。手首いてえ。回転のかかった球をなんとか打ちつなげるアヤ。ゆるい返球を間髪入れず、今度こそフォアハンドでとどめ！ さすがのアヤもこれには追いつけなかった。ピンポン球が床で跳ねる音だけが聞こえた。

「小さいのにやるなあ……」

「彼くらいの身長なら、むしろ卓球に関しては利点になるわ」

「え、そうなんですか部長？」

「他の球技と違って、卓球は決められた高さの台を使う。背が高すぎると必要以上に身を屈めなければいけないから、それよりかはちよつと足を曲げただけでちょうど良い高さになる彼の体型の方が恵まれていると言えるわね。まあ、リーチが短いのはネックだろうし、プレイスタイルにもよるから偏に言い切れないけど」

「部長、羨ましいんですか？ 自分が背高いからって」

「私はカットマンだからいいの」

打ってくれと言わんばかりの、アヤの浮いたレシーブをスマッシュした。

「すごい、サーブの時は確実に点を取ってる！」

牧野君の発言にむっとした女子部員が、

「先生のお気に入りなんだろ？ 負けんなよ」

「……」

先輩の一言に、アヤは返事をしなかった。目を伏せて、怯えてるかのようだった。

アヤにサーブ権が移る。下回転のサーブをツツキ（下回転のかかった球を、台の上でつつくような動作で下回転をかけて返球すること）で返そうとするが、ネットに引っかった。

オレのサーブにアヤはすぐ反応、ドライブショットを勢い良く打ってくる。球はオレのラケットに当たってコートの外に飛んでいった。

サーブを読まれるようになったのは、オレがフェイントをかけるのをやめたから。

勝つことを諦めたのは、居場所がなくなるつらさを知っているから。

「男子卓球同好会、どうしても創っちゃダメですか？」

みんなの視線がハジメに向けられ、一呼吸置いてから、

「……去年の男子が、ねえ」

「練習態度が悪くって、こっちまでとばっちり受けちゃって」

「あとうちのメンバーの何人かに手出そうとした奴がいてさ、それで一時期、内部でもめっちゃったのよ」

「うっわ、そんなことあったんですか？」

ハジメには耳が痛くなるような情報だ。

「それに今年は新入部員が多いし、これ以上卓球場に人入られても

……」

「場所は別の所を探します！」

牧野君が強く訴える。

「真面目に活動しますし、みなさんに迷惑をかけないようにしますから、卓球やらせてください！」

牧野君の純粋な瞳に、女子部員らが後ずさりしているように見えた。

「ダメです」

一堂々と立ち続ける女子が言い放った。

「部長、もういいんじゃない？ この子らもこう言ってるし」

「いいえ、彼らは試合に負けたのだから、卓球同好会の創立は認めません」

「……じゃあ、ピンポン同好会とかは？」

ハジメ、ふざけた提案はやめてくれ……。

「なっ、そんなの同じ」

「認めます！」

部長の発言を遮る大声。誰？ その場の全員が声の聞こえた階段方向を見る。上ってきたのは、一人の女性だった。所々癖っ毛が跳ねたままの黒の長髪と、吊り上がった目が印象的な人だった。

「私が顧問をやりますよう」

「三神先生！」

助け舟が来たとはかりに喜びながら、ハジメは先生の名を呼んだ。

「戸田君、職員室に来なさいって言ったでしょ？」

「色々諸事情がございまして……」

三神先生は向き直り、

「なあ、瀧野」

呼ばれ、部長の瀧野先輩が返事した。

「この子らに卓球やらせてあげてくれないか？」

言われて、三神先生を無言で見つめる瀧野先輩。三神先生は視線をまっすぐ受け止めた。

「……分かりました」

搾り出したかのような、低く沈んだ声だった。

「はいこれ、同好会設立申請書。書いたら私のとこ持ってきて」

職員室に戻り、三神先生が紙を差し出してきた。

「先生なんでこんなに良くてくれるんですか？　すごく面倒くさがりっぽいのに」

一言余計だハジメ。

「そりゃ生徒のためだし、それにどうせどっかの顧問やるなら楽そうなのがいいたろ？」

「先生正直っすねー」

「面倒くさがりだっ！」

一呼吸遅いです先生。

「ひいっ！」

牧野君びびりすぎ……。

「失礼しましたー」

職員室から退室する。

「よし、あとは人数と場所だな」

「オレ入るだけでやる気ないから」

「ユウヤはまだそんなこと言ってるの？」

「お前こそアヤ無理なの分かったんだから、もうやめたら？」

「最初から狙ってないし、それにまだ諦めがつかないぜ！」

「どっちだよ」

「あの、アヤさんって誰のことですか？」

「気安く呼ぶなっ！」

「ひいっ！」

「いや、ハジメこそなに様だよ」

その3（後書き）

試合描写が難しいです……。

今回以降から卓球用語が所々出てきますが、見解、説明が多少間違っている場合がございます。ご了承下さい。ググれオレ。

その4

ぼくがバス停に立っていると、若干赤茶色をしたロングヘアの、学生服でなければOLにでも間違えられそうな、大人びた女性が隣に立ちました。瀧野先輩です。女子卓球部の部長を勤める二年生で、ぼく達がピンポン同好会を創ることを一番反対しているようです。ご近所さんだとは知りませんでした。

昨日の、戸田君も橋本君も負けたのに同好会を創ろうとし続けるぼくらを、きつと良く思っていないでしょう。どうしよう、とにかく目を見て挨拶しなきゃ……。

「まだよ」

挨拶する前に話しかけられ、裏返った声が少し漏れてしまいました。

「同好会を創るには全員で五人。あと二人足りない」

バスが来ました。固まるぼくを横目に、瀧野さんがバスに乗り込みました。

朝の校門。大勢の生徒や先生が通り過ぎていく。その横でオレ達は、ピンポン同好会勧誘の呼び込みをしていた。恥ずかしい、罰ゲームを受けている気分だ。

「橋本君」

牧野君がオレに話しかけてきた。

「あまり恥ずかしがると、返ってぎこちなくなるような……」

「じゃあ、ハジメみたいに大声だしてしつこいくらい勧誘しろって？」

「そこまでは言っていないけど……」

ついついため息をしてしまった。

「……ピンポン同好会に入りませんか？」

「入りませんか？」

オレ達を指さして笑う奴、関りたくないと思視する奴らが通り過ぎて行く。

予鈴が鳴り、オレ達も教室へ向かう。途中、グラウンドを見るとサッカー部が朝練の片づけをしていた。オレ達はまだ始まってすらない。

「困るなあ、勝手にこういうことされると」

薄くなった白髪をオールバックにしたおっさん教師が面倒くさそうに言った。

「でも、おれのハートが止まらなかったんです！」

おっさん教師が睨みつけてきた。オレとハジメと牧野君が頭を下げた。

今日是最悪だ。昨日、ハジメが作って貼ったポスターだが、生徒会の許可もなく校内に貼り付けてたらしく、その件で呼び出しをくらった。活動する前から目つけられてどうすんだよ……。

「先生、プリント持って来ました」

「おう、昼休みに悪いな」

他の生徒からプリントの束を受け取ると、おっさん教師がこちらに向き直った。

「ポスターを生徒会に提出すれば許可印を押してくれるから、貼ったのをすぐ回収してくるぞ。もういいぞ」

さっさと帰ろうとしたが、プリントを持ってきた生徒が「それ何です？」と話に入ってきた。空気読めよ……。

「ピンポン同好会創るらしい」

「ピンポン？ ああ、卓球すか」

ふーんと、卓球と分かり興味を失くしたようだ。

オレ達は解放され、すぐ職員室を出た。

「あつ、ケイ君だ！」

今度は誰かと思えば、女子卓球部の先輩達が牧野君に駆け寄ってきた。

「ケイ君元気？」

「あ、はい。元気です」

「かわいいー！」

牧野君のおかげだ、女子卓球部員のほとんどはオレ達を敵視しなくなってくれたみたいだ。

「なにかあつたら声かけてねー！」

牧野君と話し終え、反対側に歩きながらもキャーキャー楽しそうにはしゃぐ先輩達の声が聞こえた。

「モテモテじゃん、ケイ君」

ふざけた態度で牧野君の名前を呼ぶハジメ。

「な、なに言うの戸田君！先輩達の真似してからかわないで！」

「からかってねえ、妬んでるんだ！」

「余計に不純だろ。な、ケイ君？」

「もう、橋本君まで！」

「いいじゃん、ケイくん」

「ハジメ、ほどほどにしろよ？」

「いいもん、ぼくも二人のこと下の名前で呼ぶからねっ！」

ちよつと怒らせちゃったかな？

三人で話していると後ろから、

「おっ、俺も入れてくれ！」

突然の声。振り返るとさっきプリントを持ってきた生徒が立っていた。しばらくの沈黙。言われたことを、みんなすぐには理解できなかった。

「ピンポン同好会に？」

ハジメがそう質問した。

「おう、もちのろんだぜ」

言い方うぜえ。しかもこの流れで入会って、下心丸出しだろ。

「あんたみたいな積極的な奴を待ってたぜ、よろしくな！」

ハジメは人を見る目がない。

その4（後書き）

ハジメは書き始めの頃からネタ要員と決まっていた。私の手のひら、いや、原稿用紙の上で全力で踊ってくれるいい奴です。

その5

職員室前で中嶋が入会したことにより、残るは一人。だが、最後の一人がどうしても決まらない。わらにもすがる思いで、オレは一人、アヤの家を訪問した。

「えっ？ えと、三角筋！」

「広背筋！」

オレの動揺による軟弱レシーブを、タケシ先輩は踏み込みでの豪快なドライブで打ち返してきた。球が横を通り過ぎていく。

タケシ先輩の方を見ると、すでにサーブの構えに入っていた。慌てて身構える。

「胸鎖乳突筋！」

流れるようなサーブフォーム。引退したにも関わらず球は速く、重い。

「じよ、上腕二頭筋っ」

「アキレスけええええええんっ！」

タケシ先輩はスマッシュを真上から叩きつけ、鋭角に急降下した球が高々とバウンドしてオレを超えるほどぶっ飛んだ。

「次はユウヤのサーブだぜ？」

「いや、タケシ先輩、オレは普通に試合つつたのに、なんで卓球で古今東西することになってるんですか？」

「そうなく、ちょっとこのお題はダメだな。何も知らない人に聞かれたらぜってえ怪しまれるな」

「そうじゃなくて……まあそっちもそうなんですけど」

「じゃあやめるか？ 同好会創るんだろ？ 俺の名前が欲しいんだろ？」

タケシ先輩がまっすぐ見つめる。相変わらずクサイ人だ。ラケットを構えた。台の向こうのタケシ先輩が、にやっと笑った。

中学の卓球部に入部した時、タケシ先輩は部長を任されていた。

持ち前の性格で人望も、そして卓球そのものの強さも兼ね備えたタケシ先輩は憧れであり、目標だった。オレとは二年の差があったせいで部内では長く付き合えなかったが、タケシ先輩の妹のアヤとオレに接点があったおかげか、今でもたまに卓球の相手をしてくれる。

「直江鎌継！」

「島津義弘！」

勢いの乗った球。オレは追いつけず、無様に空振り。

「タケシ先輩、日本史苦手じゃ……？」

「最近歴史ゲームにはまってな」

「受験生なのに何やってるんですか？」

「歴史選んでる分まだろ？ そら、服部半蔵！」

「石川五右衛門っ」

三年前。外の蝉時雨も消される程の活気あるかけ声。日差しを暗幕で遮っていたにも関わらず、館内は卓球に熱せられたかのようにみんな真剣だった。

タケシ先輩の中学最後の試合は、ファイナルゲーム内でデューズ（十一点先取で一セット獲得だが、両選手が十点で並んだ場合、二点リードした方がそのセットを獲得するルール）が七回も続く接戦だった。

どちらが勝ってもおかしくない試合で、タケシ先輩が負けた。

今もオレの脳に焼きついていて、暑い夏の日の記憶。

「そつえば、何でタケシ先輩は卓球部入らなかったんですか？」

「ああ？ 行ってみたらふざけた奴しかいなかったからだ」

なるほど、女子卓球部の話どおりだ。

「おらおら、次打つぞ！ ギガデイン！」

タケシ先輩がサーブを打ってくる。ツツキの構えをした。

「メラゾーマ！」

途端に、球は高く浮いた。回転を見誤った！ 急いで大きく後ろに下がる。タケシ先輩は大きく振りかぶった。

「ベホー……イミッ！」

ラケットを思い切り振り落としてくるかと思いきや、球の落下地点にラケットを置くように差し出してきた。弱々しくラケットに当たった球が、ネットギリギリを越えて、力なくオレの台に落下した。オレの元に届くことなく、台の上で何度かバウンドして転がっていった。

「ハッハッハッ、ひっかかったなあ！」

やられた、この人はパワープレイヤーに見えて、ちゃんと技術を持っている人なんだ。むしろフォームやテクニクがこの人の力強さを冴えさせる。

相変わらず楽しそうに卓球する人だ。

今も、夏の引退試合でも、タケシ先輩は楽しそうに、全力で卓球してた。オレも卓球がしたい。これから卓球を続けたい。

オレは大きく息を吸い込んだ。

「お題、中学時代にアヤに告白した男子生徒の名前！」

「な、待て、お兄ちゃんそんなの聞いてないっ！」

思いもしなかったお題に、慌てふためくタケシ先輩。

「臼井！」

「え、ええ？」

打ち返すことすらできないタケシ先輩。

「はい、何も言えず失点。どんどんいきますよ、山口！」

「やめろお、そんなの知らない、知りたくないっ！」

さっきまでの勢いが嘘のように非力になるタケシ先輩。

オレの番では答えられず、タケシ先輩がお題を出しても戦意を失ったのか、ラリーがあっけなく終わる。

「ごめんよ臼井、山口、高幡、じゅんぺい、松本に熊田君、相沢、小田……」。うん、アヤは女子卓球部の中でもかなり可愛い方だったもんな。みんなもアヤもオレも悪くないよきつと！ でも恨む

ならアヤと付き合っているかなんて事前に確認してきた、まだ若く青すぎた自分達を恨んでくれ。オレはただの幼馴染なだけだって。

「もう、やめてくれ。俺の、負けだ……………」

立っているのがやつとの中、タケシ先輩が白旗を上げた。

五人、揃った。

その5（後書き）

スマッシュと見せかけて浅い所に落とすのは、やられると非常に悔しいものです。逆に仕掛けた方はしてやったりです。ナルシストめ、男らしく全力で打ってこいや、なんて血がのぼらないようにしましょう。

その6

階段で、オレと中嶋が二人で卓球台を運び、ハジメが誘導しながら手を振る。

「はいオーライ、オーライ」

「しかしラッキーだったな、女卓がちょうど台を買い換えてお古が余ってたんだから」

「ふっ、おれの交渉術があつたおかげだな」

「ちげえよ！ ケイ君が頼んだからこそだし」

「でも空き教室を教えてもらったのはおれだもん……」

「勧誘ポスター注意した白髪の方が好意で教えてくれたんだろ、お前は問題起こしたただけだ」

ふてくされるかのように誘導の声が小さくなった。

「てか、おもっ！ ハジメまだ一回も運んでねえだろ。代われ今すぐ！」

ハジメが反論する。

「バカヤロウ、おれが一番オーライが上手いんだろ！ おれがオーライしないでする！」

「んなもん誰でもできるわっ！」

教室の扉が開かれた。

「うっさいぞお前ら、たかが台を運ぶくらいで騒ぐな！」

三神先生が怒鳴った。

「はい、すみません」

卓球台を床に下ろし、ローラーを転がして教室に押し入れた。
「たかがじゃないですよ、三神先生」

窓を雑巾で拭きながら、ケイ君が言う。

「これでやっと、卓球ができるんですから」

「牧野……」

「えへへ、ちよっとクサかったですね」

ケイ君が照れくさそうに頭をかいた。

「コノヤロウ、ちよつと女子に人気があるからって調子のんなやガキがつ！」

「ひいつ、先生ひどい！」

「そーだそーだ、おれも女子からモテたいぞチクシヨウ！」

「ハジメさばんなやあ！」

どの教室にも人気がなくなった放課後。だが二階の、学生棟の端に位置する教室はオレ達のはしゃぐ声で騒がしかった。

「なあユウヤ、ネットってどう張るんだ？」

中嶋がオレに訊いてくる。するとハジメが、

「なんだ、なかちはそんなのも知らないの？」

「なかちんって、変なあだ名つけんなし！」

「ユウヤ、おれにもネットの付け方教えてー！」

「お前も知らねえのかよ」

呆れつつ、ハジメにもネットの張り方を教える。初心者ばかりだと疲れる……。

「うおお！ できたできた！ よし、そしたら練習あーっ！っ！

そっういやラケットも球もねえ！」

「あ、ぼくも持つてない」

「俺もだ」

こいつらどっか抜けてんだよな……。

「初めの内は体育用のを借りたらいいんじゃない？ てか、初心者のお前らにマイラケなんてはえーよ」

へっへっへつと、いやらしく笑ってみせた。

「いや、俺元卓球部だし」

中嶋の意外な発言に、全員がどよめいた。

「なんだよなかちん、そういうの先に言おうぜ？」

「中嶋は中学どこよ？ 大会で見た記憶ないんだけど」

「そりゃ大会出たことねーし」

あっけらかんと返答する中嶋。

「え？ 部員だったのに？」

「いやー、一週間で辞めちゃってさー」

「んなもん入ってた内に入んねーよ」

「ねえ、そろそろ練習しよー？」

ケイ君がみんなを促した。

「なあユウヤ、なんかラケットが二種類あるんだけど、どう違うんだ？」

ハジメが真面目な質問をしてきた。

「オレが使ってるのがペンホルダー。で、今お前が持ってるのがシェイクハンド。ペンはフォアハンドが強くて、逆にバックハンドで攻めるのが苦手。シェイクはフォア、バックハンド両方で攻撃に転じることができて、あと分かりやすい特徴として、ラバーっていう球を打つゴムがペンは基本一枚、シェイクは裏表で二枚ってなっ

ー

「どりゃーっ！ 両手に持って二刀流だあっ」

「武蔵、覚悟しろ！」

ハジメと中嶋がオレの長ったらしい説明に飽きて、ラケットで遊び始めた。

「二人とも、せっかく説明してくれてるのにふざけちゃダメだよ」

「いやー、すまん」

悪びれた様子もなく謝るハジメ。

「じゃあもうお前らシェイクでいいんじゃない？ 今じゃほとんどがそうだし」

「ユ、ユウヤ君、そんな投げやりにならなくても……」

ケイ君の方に向き直った。

「違うんだ、テキトーとかじゃなく、今じゃもう本当にシェイクが大半なんだ。プレイスタイルにもよるけど、バックハンドで攻められるのは相当な強みで、普段ペンホルダー相手に練習しないから、

試合でペンと当たったら不慣れな分不利だなんて言われちゃうくらいシェイクばつかなんだ。どいつもこいつもシェイクシェイク……」
「ああっ、ユウヤ君が良く分らないコンプレックスで落ち込んでる！」

「よし、おれシェイクにしよう！」

「俺も！ ケイもほら持つて、練習すんぞ！」

中嶋がケイ君にシェイクハンドを手渡す。

「え、待つて、ぼくまだ決めてない……」

「シェイクでいいじゃん。だってほとんどの人がシェイク使ってることは、それだけ強いってことだろ？」

「で、でも……」

「ほつら、また一人二人とシェイクが増えていく。ふふっ、ふふふふふっ……」

「ユウヤ君？ ユウヤ君っ！」

少子化によって使われなくなった教室に、お古のオンボロ卓球台。初心者が握る、授業用の安物ラケット。先輩のいない、四人の一年生。寄せ集めだけど、きつとこれが今のオレ達のベストなんだろう。卓球ができる。

「まずは素振りから始めるぞー」

「えーっ、球打とうぜー？」

「基本もできてない奴がほざくな」

「入らないって言うてたのにユウヤ君が一番やる気満々」

「ケイ君、それ本人には言っちゃダメな。やる気なかったこと思い出しちゃうから」

「ほら二人、話聞いてんのかー？」

ハジメとケイ君の方を見る。視界の隅に、廊下の人影が映った。

小さな背丈と肩に届くくらいの長さの黒髪。覚えのある後姿が、体育館に向かって通り過ぎていった。

兄の影響が強かった。きっかけは兄が卓球をするのを見ていたからだし、初めてラケットを握ったのも家の庭に置かれた、親が兄のために買った卓球台でだった。

小さい頃は、母が良く相手をしてくれた。同年代には大抵勝つ兄を見て、スポーツ選手の子を持つ喜びに目覚めたからだろう。

小学校に入学しても、相変わらず打ち続けた。たまに兄も相手をしてくれて、敵いつこなかったが、それでも楽しかった。

小学四年生になってからある日、母親に、兄と同じように近所の卓球会に入るか訊かれた。兄もそこで同年代や年上を相手に練習していると聞かされ、深く考えもせず、うんと返事した。

聞いていた話どおり、そこには自分と同世代の女の子が、多くはなくても、それなりにいて、卓球の打球音が響いていた。ラリーの時は一定のリズムで、試合の時は、不規則かつ力強く。

馴染めなかった。人見知りの激しい性格で、すでに出来上がった集団の空気に溶け込むのは、私には難しかった。

母さんやお兄ちゃんと打つ方が楽しい。

入会して一ヶ月後には通うのを拒むようになった。幼心に罪悪感が生まれ、家で卓球をすることもなくなった。

卓球から遠ざかったまま、中学生になった。自分や、昔から見知っている友達が制服を着ているのを見て、なんだかドキドキした。

入学早々、友達何人かと部活見学ということで行くつかの部を回った。大して生徒の多い学校でもなく、入る部は限られていた。

バレーもバスケも好きじゃないし、大変そう。男子卓球部にはお兄ちゃんもいるし、卓球をするつもりはない……。手芸部か何かにしようと考えていた。

友達の一人が、次は卓球部を見ようと言った。付き合うだけのつもりで、うんと頷いた。

少しの間、女子卓球部を見学していると、先輩が自分達にラケッ

トを握らせた。軽くフォームを教えて素振りをさせると、一人ずつ順番にフォア打ちの相手をさせた。

自分の番がきた。ゆっくりとした球出しを、私は普通に返球した。未経験者ばかりだったせいかな、先輩は球が返ってくとは思わなかったらしく、驚きながらラリーを続けた。借りた授業用のラケットは使いづらく、それでもフォアハンド程度は問題なく打てた。リズムカルな打球音、ラリーは続いた。

突然先輩が打ち損じ、球が私のバックハンド側に向かってきた。冷静に裏面で打ち返すと、球は台にバウンドし、そのまま先輩の横を通り抜けていった。

私が経験者だということが分かった途端、先輩に部へと勧誘された。他の先輩達にも強く言われ、困惑しながら適当に相槌を打った。「みんなも入ってよ、ちゃんと教えてあげるから」

言われて、楽しそうだし入ろうと、みんなの意見が決まったらしかった。何の返事もせず、周りに流されるように自分も卓球部に入部した。

流されるように入った女子卓球部は、思いの外居心地が良かった。先輩達は優しくかったし、知っている友達がいるという頼りがあったこともそうだが、何より、自分にはわずかながらの実力があつた。未経験者と比べれば頭一つ飛び抜けて当たり前だ。技術を評価してもらえる。何か一つ認めてもらえれば、人間関係はスムーズにいくものだった。

なんとなくな接点しかなかった卓球が、いつの間にか楽しく感じるようになっていた。狙いどりのコースに決まれば嬉しくて、どうすれば球が速くなるか考えて、新しいサーブを教えてもらったら居残って練習して、大会はいつも新鮮な気持ちにさせてくれて、弱点ばかり突かれると本気でイラついて、上手くなってきた同級生に負けると悔しくて、空回りしている自分にへこんで、たまにだが、また兄が卓球の相手をしてくれるようになって、一度負けた子を負かして、やっぱり卓球が好きで、色んな人と接した。

私の居場所が、その時は確かにあった。

高校でも卓球を続けようと決めていた。一緒に卓球をしてた友達と部活見学に行くと、中学以上の人数と活気が目に映った。すぐさま入部した。

すると何故か顧問の先生に気に入られてしまった。素質がある、もつと強くなる。そんな言葉を並べられ、入部してすぐに私専用の練習メニューが用意された。他の子と同じ扱いをしてくれない。褒められて少し嬉しかったが、すぐにそれ以上の孤独に苛まれた。

それから先輩達の視線が突き刺さるようになった。萎縮してしまい、上手く接することができない。他の一年生は先輩達とだって楽しそうに話しているのに、私はその輪に入ることすらできない。距離を置かれる。私が口を開くときだけ静まり返る。視線が合うのが怖くて、無意識に床ばかり見つめてしまう。

私は変われてなどいなかったんだ。卓球から、人から逃げ出したあの頃と何一つ。なんてちっぽけなんだ。

それでも部長だけは、私にも優しく声をかけてくれる。部長まで妬まれてしまうかもしれないのに、申し訳なくて仕方がない。

辞めたほうがいいのか……。

私は、ただ卓球がしたいだけなのに。

「ハジメ、またフォームが崩れてきてるぞ」

「いつまで素振りすんだよー？」

ハジメがぶーぶー文句を言う。

「オレが中学ん時は一ヶ月球拾いだったから」

「は？ なげえよ」

部室のドアが開かれた。

「みんなやってるかー？」

顧問の三神先生だった。

「先生、どうしたんですか？」

中嶋が訊くと、三神先生は高らかに手に持っていた書類を掲げた。

「喜べ、お前達の初試合が決まったぞ！」

全員が一瞬、ぽかんとする。間を空けて、

「うおお、先生すっげえ！　ちょーやる気じゃないすか！」

ハジメが興奮しながら声をあげた。

「先生、そのプリント見せて」

はいよと、中嶋に手渡した。

「へえー、団体と個人戦があるんだ」

オレとケイ君が横から覗き込む。日付を確認し、頭の中が一瞬真っ白になった。

「……えっ、これ来週じゃないすか！」

「うん、そうだよ？」

三神先生がけるつと答える。

「先生、ベタっすねー」

ハジメが率直な感想を述べた。のんきなこと言ってるやがる！

その6（後書き）

今回は少し長めとなっていました、区切りが難しいです。

その7

土曜日の朝。駅前の駐輪場に自転車をとめる。だいぶ暖かくなってきた。チャリを飛ばしてきたせいで大会前から汗ばんでしまった。朝日がまぶしい。

階段を上がり、改札に目をやるとケイ君が見えた。

「おはよう、ユウヤ君」

「おはよ」

切符はもう買っているらしく、オレも財布を取り出し、値段を確認してから切符を買った。改札口のそばのケイ君まで戻り、人波を避けるべく隅に寄る。

「あとはハジメ君と中嶋君だね」

「だなー。まあまだ結構時間あるけどね」

携帯電話のディスプレイで時間を確認する。オレ達が乗る予定の電車にはまだ余裕がある。

「でも急だよな、いきなり試合とか」

「だね、まだラリーも続かないのに……」

「技術もだけど、何よりルールとかみんな慣れてないのかな……。前も言っただけど、試合に負けたら次審判だからな」

「審判こわいなあ……。でも」

ケイ君が自分の鞆の中からなにやら本を取り出した。

「じゃじゃんっ、卓球のルールブックで勉強してきたんだ！」

ケイ君が無邪気な笑顔を見せた。

「へー、えらいじゃん！ オレも中学生の頃に買ったことあるよ」
見せてという意味で、手のひらをケイ君の方に出す。手渡され、パラパラとめくると、ピンクの蛍光ペンの線がいくつも引かれてた。
「うーす！」

手を上げながら、ハジメが近づいてきた。ありがとと、ケイ君にルールブックを返す。それを見ていたハジメが、

「なにその本？ ケイ君の？」

「うん、そうだよ」

「ケイ君は勉強熱心だなー。ちょっと見せて」

「それより先に切符買って来いよ」

「横から言つと、ハジメは、あーそうだなと納得した。」

「切符いくらだっけ？」

「自分で見て来い」

「……あー、えと、なんて駅に行くんだっけ？」

呆れてため息が出た。

「で、なかちゃんは？」

切符を手に戻ってきたハジメがそう訊いた。携帯の時計を見ると、電車に乗る時間が刻々と迫っていた。遅い。

「メールはした？」

「うん、だけど帰ってこない……」

ハジメが電話をかける。

「……出ないわ。どうする？」

全員が押し黙り、固まる。

「……予定どおりのに乗らないと練習時間なくなるぞ？」

オレが電車に乗ろうと促す。

「でも……」

ケイ君が何か言いたそうにもじもじしている。

「その次の電車でも開会式には間に合う？」

「……うん、ぎりぎりだけど」

ハジメの質問に、ケイ君がおどししながら答えた。

「じゃあもう少し待つか、すぐ来るかもしれないし」

待っている間に何度か電話をかけたが、中嶋が出ることはなかった。

先に会場へ向かうとだけメールを送り、電車に乗る。

「どうしたんだろうっね？」

「寝坊じゃね？」

ハジメが深く考えず答える。

「けるつと言うな、初試合で寝坊とかねえわ」

オレが不機嫌そうに言うと、ハジメが場の空気を変えようと、話題を振ってきた。

「そういや、この試合って女子卓球部も出場するのかな？」

「この前話したら出ないって言ってたよ」

「ケイ君また女卓の先輩達と話してたのか、コノヤロウ！」

「だ、だって話しかけてくれたんだもん……」

「うぎゃー、モテる発言すんなっ！」

「おい、騒ぐなよ」

電車を降り、駅を出てすぐそばに立っていたバス停の時刻表を見る。

「次のバス何時ー？」

ハジメが駆け寄りながら訊いてきた。

「まあすぐだな」

そう答えてベンチに座る。ハジメとケイ君が隣に腰を降ろした。バス停でもバスの中でも、それ以上会話はなかった。

その7（後書き）

事前にルールブックで勉強する人は真面目、勉強どころかルールブックすら持っていないのはハジメ。

その8

目的地の会場の門を抜ける。やっと着いたか。

「そっぴや、何で会場が小学校なの？ オレら高校生なんだし、普通は市かどつかの体育館じゃないの？」

「え？ だって出場者」

校門に乗り入れた赤のスポーツカーがオレ達のすぐ横に止まった。
「あんた達今着いたの？」

乗っていたのは三神先生だった。スーツを着てはいるが、上着を助手席に放り、着崩している。

「中嶋は？」

「まだ来てないっす」

「あいつやっぱ使えないわー」

「あいつ使えないんすよー」

生徒を使えない言うなよ、しかもやっぱって……。

「じゃあ先体育館入って」

車のウィンドウを閉め、三神先生は駐車場目指して車を進めた。
直接体育館の入り口から入り、体育館フロアを覗くと、

「おいハジメ、子供ばっかだぞ！」

「だから、みんな選手だって」

ハジメが鞆から大会の概要が書かれたプリントを取り出し、手渡してきた。取り上げてよく見ると、出場者欄にはジュニアからシニアまでと書かれていた。

「ほら見てみ、子供だけじゃないし」

「じっちゃんばっちゃんがちらほらいるのを、なにがほらだっ」

「ちらほらってなんだよ、お前こそ年寄りくさい言葉つかいやがって。はっはっはっ」

「笑ってんじゃねえ！」

もう一度会場を見渡す。

「他の高校はどこだよ？」

ハジメが会場を見渡す。

「そついやいないな」

「えと、地域の学区からして、ぼくらの他に出場してそうなのは他に一校だけじゃないかな？」

「一校だけ？　しかもいないっぽいし」

拡声器独特のでかくてかすれた声がした。

「開会式を始めますので、練習をやめて下さい」

選手がみんな球を打つのをやめ、ステージ付近の台をどかし始めた。

「お前らさつさと着替えなくていいのか？」

後ろから三神先生に声をかけられた。オレ達は荷物を会場の隅に放置し、オレは中学時の卓球用ウェアに、ハジメとケイ君は高校の体育授業用の短パン半袖に着替えた。なんだこのもやもや感は……。

開会式は開会の言葉で始まり、ルール説明、施設の使用について諸注意など、簡素なものだった。整列しても子供や老人しかない。最後に、団体戦用のメンバー表を受け取りに来るよう言い渡され、ハジメがそれに向かった。

開会式も終わり、体育館の隅に放置していた荷物の元へ戻った。

他の出場者もフロアの片隅に場所をとっている。

「ケイ君、返信きた？」

中嶋から返事がきたか訊いてみるが、メールは返ってきていないらしい。

「じゃあ団体は三人で出場だな」

用紙を手にして戻ってきたハジメがそう言った。

「三人でも出れるって？」

「おう、おっちゃんがいいよって言うてくれた」

「じゃああとは組み合わせだな」

今回の団体戦は初戦にシングル、次にダブルス、しめにまたシングルという流れだ。予定では先発のシングルにハジメ、次のダブル

スにケイ君と中嶋、最後にオレのはずだった。が、中嶋の欠場により……。

その8（後書き）

次から大会開始！

その9

「したら、気張って行って来い！」

「先生、相手小学生つすよ？」

「へえ。言うじゃないの」

三神先生の意味深な発言と含み笑いに、ハジメは不可解な恐怖を感じてぶるつと体を震わせた。

「ハジメ君、はやくっ」

ケイ君にせかされ、ハジメが卓球台前に並んでいたオレ達に加わった。相手チームはとくに整列していた。相手チームの一人が息を吸い込み、号令をかける。

「きをつけ、れい！」

「……お願いしまーす」……

相手の代表と対戦表を交換した。団体戦では通常、自チームの選手がどういう順番で出るかを対戦表に記し、試合を始める前にそれを相手チームと交換することになっている。相手の出方次第で選手を変えるのを防ぐためだ。まず最初は、予定どおりハジメに行かせることにした。

相手にラリーを頼まれ、少し緊張しながら返事をするハジメ。するとハジメは小学生の球出しをフォアハンドで、思い切り振り抜いた。相手の顔面にヒット、主審のオレは引きつった表情で見っていた。ハジメがすぐ謝る。

「ご、ごめん！」

ピンポン球を持ち直した小学生がハジメを見下す目で、

「お前、下手だな」

「……もう始めようか、クソガキ」

小学生の挑発に乗るなバカ！

選手互いにラケットを交換し、確認する。試合前に相手のラケットを確認する恒例の作業も、知識のないハジメには意味がないだろ

う。

ハジメは卓球経験が浅い。一週間前に始めたばかりの、ラケットの握り方しか知らないような人間だ。そんなド素人が、吸収の早い幼い頃から練習を積んでいる人間と対戦だなんて、無謀すぎる。構えからして違う。相手は体に刻み込まれたかのような慣れを感じるが、ハジメの構えはどこかたどたどしい。

「ラブオール」

ハジメがストレートのサーブを打つ。相手は序盤から力強くスマッシュを打ってきた。目すら球に追いつかず固まるハジメ。

「ラブワン」

カウントで我に返る。だが付け焼刃のサーブでは、この状況を打開などできない。

ハジメのサーブのたびに、サーブ、スマッシュを繰り返し、一セット目が終わった。審判である以上アドバイスはできないのだが、元より助言したって……。

だが少しずつ、ハジメがスマッシュ球に追いついて、きた？というか、やけになって手をのばしてるというか……。ハジメの目がすわってる。

マッチポイント、予想どおり相手のスマッシュ。が、ハジメのラケットがついに球に当たった。だが球は台を大きく越えて飛んでいってしまった。

試合終了。ハジメは礼をしてしょんぼり帰ってきた。

「ハジメ君、元気出して。最後おしかったよ！」

「ケイ君……」

若干目が潤んでいるハジメ。ケイ君の優しさに心動いたのか、はたまた負けたことが相当ショックだったのか……。

「アッハッハッ、一点も取れてないでやんのー！」

そして茶々を入れる教師。なんて大人だ、指をさすな指を。

その9（後書き）

子供って背が基本低いから、大人じゃスマッシュ打たないだろう高さでスマッシュ打てちゃうことが多々あるんですよねー。自分の持っているもの全て武器にしまうとはなんとたくましいことやら。

その10

二試合目のダブルスは、オレとケイ君との即席コンビで挑むことになった。

試合前のラリー。出された球をオレが軽く返球する。相手もフォアハンドが打ちやすい位置に返球してくる。ケイ君の番。が、ラケットが届かず、空振り。ラリー二球目もケイ君が打ち損じて止まった。練習期間が一週間しかなかったといえど、昨日はまともに打っていたのに。緊張か？

「ケイ君、落ち着いていこ。楽しくね」

「う、うん」

卓球のダブルスはテニスなどと違い、打つ順番を交互に変える決まりがある。オレが打ち、相手が返球してきたら、次はオレではなくケイ君が打ち返さなきゃいけない。どれだけオレの番で終わらせられるかが今回の課題だろう。

小学生相手とはいえ、久々の試合に少し興奮しているのが自分でも分かった。

サーブ一発目、左に回転を思い切りかける、相手は空振り。先制点をゲット。サーブする位置が変わり、二球目。サーブの位置がずれることにより、レシーブする相手も変わる。こいつはどうか？ 同じサーブを放ると、レシーバーの球はネットに引っかった。

この子らには十分通用するな。

サーブ権が移り、相手のサーブ。当然のように回転をかけてくる。ケイ君のレシーブがネットにかかった。ケイ君にはフォアハンドとバックハンドをかなり手短に教えたただけだ、当然そうなる。

「ごめん、ユウヤ君……」

申し訳なさそうに謝るケイ君。

「いいよ、気にしないで。な？」

励ませど、ケイ君は顔を落ち込ませたまま。

続いてオレがレシーブ。ケイ君に打順が回る前に終わらせるつもりできわどいコースを狙うが、相手が俊敏に反応。即席コンビと違ってダブルス慣れしている。球はオレ寄りに向かって返ってくるが、さほど勢いはない。ケイ君せめて追いつけ！

球が台の上を一度はねると、そのままフロアへと落ちていった。

ケイ君に目をやると、球から遠く離れた場所から必死に手だけ伸ばしていた。

「ご、ごめんね……」

あー、わかったぞ。

「ケイ君、ちよっと」

「え？」

「もっと球に近づいていいんだよ？」

「う、うん………」

「ケイ君、遠慮してちゃダメだからね？ オレにぶつかるんじゃないかってくらい動いてでも球を打つんだよ？」

「うん、ごめんね………」

まいったな……。

「……あちゃあ」

「まあ、今のはしゃーないだろ、慣れてないんだし」

「そうなんですけど………」

「……あ、また」

「練習の時はまともに打ててたんですけどねー」

「ふーん」

「あがつてるのかな？」

「……てかさ」

「なんです先生？」

「橋本のサーブの構えって、なんかカマキリっぽくね？」

「ええ〜？ ユウや普通に打ってますよ？」

「いやなんかさ、動きが本格的すぎるというか」

「あー、回転かける時のラケットとか、言われりゃそんな気も……」
「だろ？」

「それ言われたら他の人とかもみんなカマキリに見えちゃうんすけど。キモチわるっ」

「うつひやつひやつ、みんなカマキリとか、やばい、私も、ククッ！　じいちゃんばあちゃんのカマキリ特に強烈だな！」

「もー最悪だわー」

ケイ君をカバーできず、ダブルスは敗北。この時点で一回戦敗退が決定した。

「足引っ張ってごめんね」

「もつと積極的にいかなきゃ」

「うん、ごめん……」

うつむくケイ君。

「まあ、時間なかったんだから、しょうがないか。てか、何より中嶋が悪い」

ケイ君のトラウマにならないように慰めた。

「そっぴゃ、なかちゃんから返事きた人いる？」

みんなが携帯電話を確認する。

「あ、メール来てた」

オレの携帯がメールを受信していた。携帯のディスプレイには、寝坊した！　の文字と涙の絵文字が写っている。さっさと来いと返信して携帯をしまった。

午後の個人戦までだいぶ時間が空く。邪魔になるため練習もできず、他の試合を観戦する。

「ケイ君、あそこの試合すごいよ。めっちゃ打ち合ってる」

「うわあ、ほんとだ」

「ハジメ、お前も見えてみ。見るのも練習になるから」

フロアに全身を伸ばしてだらけながら、

「やだ、みんなカマキリなんだもん」

一体なにを言ってるんだか……。

その10（後書き）

プレイそのものに性格が現れるものです。私はダブルス時にパートナーにラケットをぶつけたことがあります。がさつですんません、でも反省はしない。

その11

マナーモードにしていたオレの携帯が振動した。中嶋からの電話だ。

「もしもし？」

「おおユウヤ、今電車降りたんだけど」

「お前なに遅れてんだよ、何かあった？」

「いや寝坊」

初の大会で寝坊だあ？

「でさ、こっから会場にどうやって行くの？ 何行きのバスつか

」

「ぼちっ。ツーツーツー。」

「誰から電話？」

「ハジメがきよんとした顔を向ける。」

「知らん」

明らかにむすつとした表情で返答すると、ハジメは言葉を詰まらせた。すぐハジメの携帯が振動し、ハジメが電話に出た。

ダメだ、ここでイライラしても始まらない。結成したばっかなんだ、統一性とかはとにかく無視だ。ったく、やっぱ一人の方がらくだ。

「おい、ユウヤー？ おーい？」

ずつと声をかけられていたらしい、気づかなかった。

「飯買いに行こうぜー？」

「お、おう」

オレらが会場の端で弁当をつついてたその時、中嶋が遅れてやってきた。

「わりー、寝坊しちゃった」

ハジメとケイ君が顔をほころばせて中嶋を迎え入れる。

「まあ朝早かったしなー」

「良かった、個人戦には間に合うよ中嶋君」

「おつ、まじか。てか腹減ったよ」

個人戦に間に合えばオツケイなのか？ 心配させといて、腹減っただと？

「中嶋、お前どういう神経してるんだ」

オレの堪忍袋が切れる寸前に、オレのじゃない声が低く、静かな怒りとして吐き出された。三神先生だった。

「お前のせいで他のメンバーは練習すらできずに、予定外の組み合わせで試合に出たんだぞ？ どれだけ迷惑かけたと思ってるんだ」
場が静まり返った。三神先生が先生らしいことを言ってる……。

「……すいませんでした」

中嶋がオレ達全員に向かって頭を下げた。ハジメとケイ君が、中嶋に優しくフオーした。

三神先生と目が合うと、先生はにかつと笑った。テキトーなふりして、周りのこと見てるのか、この人……？

「先生、さっきの教師っぽかったっすね」

ハジメがオレと同じ感想を口にした。

「戸田君、君は先生に喧嘩を売ってるのかな？」

三神先生は微笑むものの、目が笑ってなかった。

中嶋が駆け足で弁当を買ってきて、胃に詰め込む。ちょうど団体の決勝戦が終わり、個人戦へ移った。アナウンスが流れ、代表者がトーナメント表を取りに行く。

全員に表が渡され、オレも目を通す。といっても、誰が誰だが分からんし、いまいちぴんとこねえ。各々がもやもやした表情をする中、ただ一人、ケイ君だけは畏怖するように震えていた。

「ユウヤ君、どうしよう……。ぼくの相手、団体戦の優勝チームの人……」

団体の決勝戦は、小学校高学年らしきチームと、二十歳前後のお兄さん一人とおじいちゃん二人が合わさった異色の大人チームの試合だった。小学生チームも決して弱くはなかったが、圧倒的な大人

チームの強さにストレート負けしていた。大人気ないと見るか、スポーツマンらしい全力な試合だったと見るか……。ケイ君の相手は、その大人チームの内の一人のおじいちゃんだ。

「まあ冷静になれよ、ケイ君」

ハジメが話に入ってきた。

「どうせ相手が誰だろうと勝てやしねえんだから、思いっきりやりやいいんだよ」

「なんちゅう意見だボケエ！」

「まあそのとおりだからな、相手の胸を借りるつもりで行って来い！」

三神先生まで余計なこと言いやがって！ 台に向かうケイ君の背中がしおれていくのが分かった。

「てかハジメ、お前の試合ももう始まるぞ？」

「なに？ そいういや相手は誰だ？」

トーナメント表に目を落とす。あれ、これってもしかして……。ハジメが指定された台に向かうと、反対側には団体戦でハジメを負かした小学生が立っていた。

「ぎゃああああああああ！ もういやじゃあああああああ！」

「戸田、落ち着け！ 潔く散って来い！」

「先生さつきから余計なことしか言ってねえ！」

ハジメの試合は団体戦のリプレイを見ているように、あっけなく終わった。

その11（後書き）

遅刻なんて一番やってはいけませんよね。寝坊したり二度寝したり
バスに乗り遅れたり……ごめんなさい。

その12

「さて、そろそろ帰るかー」

ハジメが制服を広げ、着替え始めようとしていた。

「いやいや、オレの試合まだ残ってるから」

準備運動しながらハジメに答える。

「……………ハハッ」

そして黙るハジメ。

「……………なんだ今の反応？ 関心なさすぎるだろ！ こっち見ろや、着替え続けてんじゃねえ！」

「ケイ君、帰りにツタヤ寄ってかね？」

「ツタヤ行くなあああああああ！」

試合する前から息切れを起こすほど叫んだ。

「うつさいなー、だっておれもケイ君もなちんも試合終わったしー。もうずたばろだったしー」

「ハジメ君、ユウヤ君の試合の応援しなきゃ」

ケイ君は思いの外朗らかだった。というのも、対戦相手とあまりにも実力差があつたために、相手のおじいちゃんが熱心に指導してくれたそうだ。

「すごかったんだよ、少し打っただけでどこが悪いか見抜いてくれて！ でね、教えてもらったとおりにしたら球が狙いどおりにね」

「」

試合に負けてこんなに明るくなるのも珍しい。まあ、あの一戦で何かつかんだなら儲けもんだろう。

「そっぴいや中島の試合は？ オレ、ケイ君の試合見てたから分らないんだけど」

「ああ、俺？ いやー、負けちったわ」

「ちっちゃい小学生相手にストレート負けだったな」

ハジメがからかうように付け加えた。

「小学生マジつええ」

「そつか。訊いといてなんだが、どうでもよかったわ」

「少しは齒に衣着せようぜ？」

ハジメが珍しく良心的な言葉を返した。

小学生を叩き潰すことに罪悪感があるかと訊かれたら、そりゃ少し良心が痛むんだけど、一応年上だしオレも経験者だし、面白いように点が取れた。

審判の号令と共に、相手に礼をする。まあ楽勝だったな。

「ユウヤ君すごい！一回戦突破だね」

「いや、すごくないって。前からやってりゃこんくらいはな」

相手が相手な分、天狗にもなれない。

「え、まだ帰らないの？」

鞆を肩から吊るした制服姿のハジメがそうぼやいた。むかついたから室内シューズで蹴り飛ばしてやった。

「次の相手は誰だ？」

同じく制服姿の中嶋が訊いてきた。こいつも着替えてやがる。

「多分、あの人」

視線を向ける。その先には、若い男が一人。

「あの人って、団体戦で優勝したチームの人じゃん」

おじいちゃんに混じってた、大学生くらいに見える青年。茶髪で若干ガラが悪く見え、近寄りがたい雰囲気を感じる。

「おいユウヤ、卓球やってる人つてもっとおとなしい人ばっかじゃねえのか？」

「んなもん偏見だろ」

小学生よりか骨がありそうな相手だ。

他の試合が次々と終わり、ようやくオレの二回戦が始まる。すぐに台に行き、打てる準備をする。相手は落ち着いた足取りで台についた。

「よろしくおねがいします」

挨拶すると向こうは、

「よろしく」

と砕けた態度で返してきた。

試合前のラリーを始める。軽く球出し。向こうも普通に打ち返してくる。返ってきた球を、相手に打ちやすい位置へ向け、フォアで返球。すると相手は突然、右手を背中にあわし、己の左側の球を右手で打ち返してきやがった。驚きつつ、普通にそれを打ち返す。向こうは球を受ける度に機敏にフォア打ちと背面打ちを切り替えてきた。この野郎、遊んでやがる……！

ラリーを終わらせ、ラケットを交換。相手はシェイクハンド。どれどれ。若干重いな。げっ、このハイテンションラバー扱い難くないのか？ 思ったとおり熟練者だな。ラバーからしてドライブ主戦型と見た。お、このパワーテープ、オレが前使ってたやつだ……。「あいつ、相手のラケット見る度に目が怪しくなってるじゃないか？」

「先生もそう思います？ なんかぎらついてて怖いっす」

試合開始。相手が高々と球を上空に上げる。落下する球目掛けて回転をかける。それをツツキで返そうとするが、ネットにかかった。もう一度サーブを受けるが、同じくネットに引っかかり失点。回転が読めねえ！

オレにサーブ権が移る。台の端ぎりぎりに打ち込む。が、野郎はまた背面打ちで返してきた。しかも球が速い、追いつけずに球が通り過ぎた。うぜえ。なにがうざいつて、ふざけてるくせにめっちゃくちゃ上手いことがだ。今度は右手左手と交互にラケットを持ち替えながら打ってきた。どっちでも同じくらい球に勢いがある。なんなんだこいつ、大道芸師かなんかか？

「なんだかあの試合楽しそうだな」

「いやなかちん、ユウヤの顔が明らかに引きつってるぞ？」

バスを待つ。その間にハジメがしゃべくるが、話の内容が全く耳に入っていない。

「てか腹減ったー、サイゼでも行かね？」

「俺クーポンあるよ」

「え、でも帰りに寄り道しちゃだめなんじゃ……」

「……け……た……」

「ケイ君真面目すぎるだろ、高校生になったら買い食い寄り道当たり前っしょ」

「もしかしてサイゼ初めて？」

「ファミリーストランだね？　あまりそういうところ行ったことなくて……」

「……ま……け……」

「まじかー！　そうだ、今度みんなでカラオケでも行かね？」

「ええっ、ぼく無理だよ、歌えないよぉ」

「いいからいいから、そういうのも経験だって」

「う、う、うがああああ！　あんなのに、あんなのに負けたああああああ！」

「ユ、ユウヤ？　おい落ち着け！　なんだ、カラオケがいやなのか？　ならボウリングでもいいんだぞ？」

「ええっ、ボウリング投げれないよぉ」

「うぐがああああああああああああ！」

その12（後書き）

今回ユウヤが試合した相手、実はモデルがいて、本当に背面打ちや打ち手の切り替えなんてテクニカルな遊び打ちをする人がいました、あくまで試合前のラリーででしたが。実力のある人間は、遊び方もまた常人離れてますね。

その13

季節は六月の初夏へと移ろうとしていた。気温は上昇する一方で、そろそろブレザーが鬱陶しくなってきた。ネクタイを緩めてワイシャツのボタンを第二まで開けて、身なりの通気性をあげる。だらしないままの格好で廊下を歩いていると、三神先生にその場で呼び止められ、他の教師には見つかるなよとたしなめられた。そのまま歩き続け、部室として使っている教室のドアを開く。卓球台の横で、ケイ君が素振りをしていた。素振りをやめて振り返るケイ君。

「あつ、ユウヤ君！」

「相変わらず早いなー」

鞆を端に置き、その場に座り込んだ。体勢を崩し、ケイ君を見上げる。

「早く練習したくて」

「そっか」

「ハジメ君は一緒じゃないの？」

「ああ、ホームルーム終わったらいつの間にかいなくなってるな。まだ来てないのか」

心配そうな顔をするケイ君。

「それよりちよつと素振りしてみてよ」

ケイ君が素直にその場でラケットを振る。もう違和感もなく、形になっている。

「いいね、さまになってきたじゃん」

ケイ君がにかつと笑った。こういう子が男女関わらず人に好かれるんだろうな。

「じゃあラリーするか。せっかくケイ君もラケット買ったんだし」

「うん、打とう！」

ケイ君同様にオレも体育授業用の短パン半袖に着替え、ラケットの準備を済ませてからラリーを始めた。部室のドアを開く者はおら

ず、オレとケイ君の二人きり。遂にハジメも来なくなったか。

ピンポン同好会初の大会は、団体戦と個人戦共々あっけなく負ける有様だった。まあ初心者寄せ集めなんだから、当然の結果だろう。だがそれ以降のうちはひどい。ただでさえ少人数だというのに中嶋の不参加が目立つようになり、今日に至ってはハジメまでも部活をさぼったようだ。

「ケイ君はさ、部活辞めようとか思わないの？」

ラリー中にそう問いかけた。ケイ君が打ち損じ、慌てて球を拾い上げた。

「……思わない、かな？」

「……ふーん」

ラリーを再開した。集中してなのか気まぎれなくなったからなのか、ケイ君は黙々と打ち返してくる。

練習を切り上げ、二人で帰ることにした。

「なあ、ちよつと飯いかない？」

校門を出てからケイ君にそう提案した。

「ダメだよ、寄り道しないで帰らなきゃ」

「とか言つて、試合のあとみんなでファミレス行っただじゃん。ケイ君一番興奮してたくせにー」

「だって、楽しかったんだもん……」

「だろ？ いこいこ、オレ新発売の食べたいんだよ」

バスには乗らずに歩いていく。学校から歩いて十五分ほどにハンバーガーショップがある。こちら学生のたまり場と化したそこは、学制服だらけだった。

「ケイ君はなに頼む？」

列に並びながら壁に貼られたメニューを見る。どうしようかなと、ケイ君は悩んでいた。

「あれ、ケイ君？」

後ろから声をかけられた。聞き覚えのある声。

「あー！ 寄り道いけないんだー！」

「ご、ごめんなさい！」

「ケイ君、こいつも寄り道してるから……。ハジメ、なにしてんだよ？」

「こんなところで寿司でも頼むと思うか？」

「相変わらずひょうひょうと答えてくる。」

「そうじゃなくて、今日練習来なかっただろ？」

「ああー、まあそうだな……。とりあえず一緒に食うか」

オレとケイ君は注文を済ませ、順番が回ってきたハジメに、

「ハジメ、向こうの席いってっから」

「オッケー」

座って待つてることにした。

「えっと、チーズバーガーのセットで飲み物コーラ、あとお姉さんのスマイル一つ」

足早に席へ向かった。

ハジメはコーラとポテトと番号の書かれた札を載せたトレイを持って席に来た。ハンバーガーはでき次第運ばれてくるらしい。

「で、卓球はどうすんだよ？」

単刀直入に訊いた。

「え？ 続けるよ」

「じゃあ練習来いよ、もう飽きて辞めるつもりかと思っただろ？」

オレとハジメが話す傍ら、ケイ君は長いポテトを端から小刻みに噛み進めている。リスみたい。

「最近、なかちん来なくなっただじゃん？」

ハジメが真面目なつらで話を続ける。

「おれなりにちよっと探り入れてたんだよ。なかちんと仲良い友達に話聞いてみたりして」

「さばって何してるか調べてたってこと？」

「人のプライバシーを暴くなんて褒められたことじゃないけどな。メールも電話も返してこねえし、直接会うのも避けてるみたいだか

ら、こうするしかないと思って。で、ここに来てみたってわけ」

「ここ？ どういう」

「お待たせしました、番号札三番のお客様ー」

オレの言葉を、ハンバーガーを持ってきた店員が遮った。視線を下げ、話すのを一旦やめた。

「あ、中嶋君」

ケイ君が目を見開きながらそう言った。ケイ君の言葉につられて、店員の方を見る。店の制服を着た中嶋が立っていた。

「なんだ、お前らかよ」

「中嶋君ここでバイトしてるんだ、カッコいい」

ケイ君の感覚が良く分らない……。

「そんじゃな」

何事もなかったようにハンバーガーを手渡し、去ろうとした中嶋をオレが呼び止める。

「おい中嶋、バイトするならするってちゃんと見えよな」

「ああ、悪い。っつーわけで部活出れないから」

あっけらかんと答える中嶋。

「毎日バイトするわけじゃないんだろ？」

「いや、遊んだりもしたいしさー。バイトの子がみんなかわいくてがたっ！」

「おい、なかちん！」

ハジメが席を立ち、大声を上げた。こんなに熱くなるハジメを今まで見たことがない。

「なかちん、いや、中嶋さん！ おれにも女の子紹介してください！」

このくそつたれが！
がたっ！

「二人とも不純だよっ！」

ケイ君が立ち上がり、店から飛び出してしまった。

「おい待てよケイ君！」

がたっ！

「中嶋君、今の話によ！」

店の制服姿の女の子がカウンターから飛び出し、中島に怒鳴りつけた。

「私と付き合っくんじゃなかったの？」

「みさ子ちゃん落ちていて、これは違う」

「言い訳しないでよ！」

ビンタの音が店中に響いた。

「うわあああああん！ 中嶋君のばかあ！」

みさ子と呼ばれた女の子が泣きながら外へ出て行った。

「お前ら全員めんどくせえええええええ！」

その13 (後書き)

中嶋なまあ
www

その14

学生の帰宅ラッシュが過ぎたおかげでバスはガラ空きで、オレとハジメは最後部の座席に座った。

「ケイ君まじで帰っちゃったんだなー」

「お前が変なこと言い出すからだろ。呆れてもう来なくなったらどうするんだよ？」

ハジメは腕を上へ伸ばしながら、

「平気平気。あの子何気に意思固いよきつと」

「つたく、無責任というかマイペースというか……」。

「とりあえず月曜からまた練習出るんだろ？」

今日は金曜日だから、来週の月曜日まで学校は休みだ。

「もち」

「じゃあそれはいいとして、中嶋はどうするよ？ あいつこそ来る気ないぞ」

「ないな」

今度は背もたれに埋もれるように寄りかかり、顔を天井に向けるハジメ。

「まあいいんじゃない？ 出たくないなら出ないで。なかちんの時間しばねえよ」

「……そうか」

やりたくない奴に無理矢理やらせても仕方ないのは分かるが、ハジメほど柔軟に対応なんてできない。こいつははずれてるんじゃないかと、無駄に力んでないんだろうな。

「ユウヤこそ良かったのか？」

「巻き込んでいて今更かよ？」

「とか何とか言っつて、本当は卓球したかったんだろ？」

「べつつにー。ただ他に入りたい部もなかったし」

「またまたー。素直になっちゃいなよ！」

演技くせえ喋り方しやがって。

バスは終点の駅に着き、そこで降りる。二人とも同じ電車に乗り込んだ。

「そっぴやお前まだラケット持ってなかったよな？ そろそろ買うか」

「ラケットっていくらくらいすんの？」

「ピンきりだけどファーストだし、まず板の部分で五千円くらいだろ、それにラバーも一枚三、四千円くらいか。シェイクだから当然ラバーは二枚必要」

「計一万三千円も？」

「単純計算でそんなくらい。あと接着剤とかクリーナーとかもいるな」

「たっけえよ」

「金ないの？」

「ちよつとハンバーガー屋でバイトを……」

「お前、金よりも女の子目当てで通うつもりだろ？」

「ありや冗談だったの」

周りに迷惑にならない程度に語気を強めるハジメ。

「そうかそうか、お前はアヤー筋だもんなー」

「からかうように言ってみせた。」

「うぎゃー、うっさいわ」

珍しくうつろたえる姿に、つい声を出して笑ってしまった。

「なっ、笑うなって」

「いやーわりい」

「てか、ユウヤはアヤちゃんと知り合いなんだろ？ 彼氏とかいる

の？ タイプとかは？」

「知らねえよ、もうずいぶん喋ってねえし」

「いーじゃん教えるよー、協力しろよー」

電車が駅で止まった。

「今度ラケット買いに行くからな」

じゃあなと片手を上げてオレ一人電車を降りた。

「けちー！」

ドアの閉まる間際、ハジメの幼稚な悪口がかるうじて聞こえた。

部室のドアを開けると、相変わらずケイ君が一人素振りをしていた。振り返ったケイ君に向かって、オレの隣にいたハジメが頭を下げた。

「この前はさぼっちまってすまん」

「ううん、いいよ。事情があっただし」

「いやー、申し訳ねえ。今度サボるときは前もって連絡する」

「サボること自体許されるわけがねえ。バカ言っでないで練習するぞ」

「ちゃっちゃんと着替えるか」

体操着に着替え、ハジメが鞆から平べったいケースを取り出した。

「シャキーン！」

ケースからラケットを取り出し、高く掲げるハジメ。

「ハジメ君もラケット買ったんだ！」

「おう、ユウヤに見繕ってもらった！ 早速球打とうぜ！」

「とりあえず素振りからだ」

「けちー！」

その14（後書き）

ラケットって意外にお金がかかるんですよ。でもその分愛着も沸きます、ファーストならなおさらです。映画「ピンポン」でラケットを焼却炉に入れるシーンは、号泣こそしないものの、胸が痛くなるほど悲しいシーンです。

その15

平日は全て授業と部活に追われるようになり、気づけば七月、とつくに半袖と夏用ズボンで過ごす時期となっていた。今日もホームルームが終わり、いつもどおりハジメと一緒に部室に向かうと、部室の前でケイ君がドアガラスから中を覗き込んでいた。

「なにしてんの？」

「あつ、えつと！ えつと！」

「ケイ君なんでてんぱってんだよ？ ここはうちの部室なんだから、我が家のようにリラックスしようぜ」

へらへら笑いながらハジメがドアを開いた。だが次の瞬間、ハジメが勢い良く後退し、その場に尻餅をついた。言葉を失い、ただ視線をまつすぐ向けている。状況を呑み込めず、オレも顔を覗き込ませた。

アヤがいた。

その場に座り、マンガ雑誌を床に置いたまま開いている。あれは多分、ハジメが置きっぱなしにしていたものだろう。何故マンガを読んでいるとかそうじゃない。

「なんでお前がいるんだよ？」

オレの声に反応してアヤが振り向いた。ハジメは石のように固まり、ケイ君は未だドアに隠れて姿を現そうとしなかった。

「……なんでだろ？」

「部活はどうした？」

「休んだ」

淡々と答えられ、アヤの真意が読み取れない。質問を続ける。

「で、なんか用か？」

「……卓球続けてるの？」

オレの質問は無視かよ。

「同好会創ったくらいだしな」

「そっだよね」

「……なんかあった？」

アヤは視線を合わせないで「別に」とだけ答えた。

オレもアヤもだんまりを続けていると、ハジメが部室に入ってきた。

「あ、あの、お、お、おれ、おれれれれ」

緊張しすぎてなに言ってるかさっぱりだ。

「アヤ、こいつの名前知ってたっけ？ 戸田初っつて、うちの部長。前に打ったの覚えてるか？」

アヤがハジメの方を向いた。視線に気づき、とっさにうつむくハジメ。

「……ハイジ君？」

「違う、ハジメだ」

ほとんど覚えられてないことが判明し、ハジメは明らかに落胆した。かわいそうな奴。あつ、そっだ。

「今日はもう部活出るつもりないんだろ？ 軽く試合してかね？」

普通ではありえない提案だが、物は試し、言うだけならタダだ。

「……いいけど」

了解してくれた。

「よし。そんじゃハジメ、さっさと準備しろ」

急に振られて飛び跳ねるほど驚くハジメ。

「はあ？ なんでおれなんだよ！」

「どんだけ成長したか分かりやすいだろ？ ほら、アヤが待ってるぞ」

「てめえ殺す！ 絶対殺す！」

二人が手短にラリーを済ませ、本人は不本意そうだが、ハジメのリベンジ戦が開始された。

「ラブオール」

審判はケイ君にしてもらうことにした。これも練習だし、いざとなったらオレが補助する。オレは二人の試合をじっくり見させても

らうことにした。

まずはアヤがサーブを打つ。以前同様、キレの良い横回転をかける。ハジメはツツツキでレシーブしようとするが、回転を読み間違え、ネットにかかる。二球目も同じサーブに引っかった。

次はハジメのサーブ。バックサーブ（バックハンド側からサーブを打つこと）の構えをし、下回転をかけつつ打つハジメ。アヤがツツツキで返球した。ハジメも同じように返す。ツツツキの応酬。ハジメは何だかんで器用な奴だ。ただつなげるのではなく、時には奥へ、時には浅い位置へ、不規則に打ち分けている。事実、ツツツキに関してはケイ君より覚えは早かった。攻撃したくてもできないアヤはさぞかしいだろう。ツツツキ戦はハジメが制した。

ハジメ二回目のサーブも同じく下回転。ハジメはまだ下回転のバックサーブと、フォアサーブ（フォアハンド側からサーブを打つこと）のストレートしか覚えていない。どれだけ二つのサーブで持ちこたえられるか……。アヤがツツツキではなく真逆の上回転、いわゆるドライブで打ち返した。元々かかっている回転以上に真逆の回転をかければ、相手に合わせずにすなり打ち返せる。決められると思いきや、ハジメはなんとか追い付き、球を打ち返した。だがアヤは動じず、ハジメの真逆の位置へ打ち、さすがにこれには追い付かなかった。あのレシーブを返したんだ、十分なくらいだ。

試合は進むにつれ、アヤに主導権が移っていった。場慣れしているのもあり、ハジメの癖や弱点を把握するのにそう時間はかからなかったようだ。

ハジメのバックサーブの構え。もうアヤには下回転が来るとばれている。もっと時間があればサーブのレパトリーも増やしてやれるのに……。サーブトスをする。トスの構えからしてバックサーブを打つと思いきや、ハジメは即座に体の位置を変え、フォアサーブを打ち込んだ。バックサーブの下回転が来ると身構えていたアヤはわずかに反応が遅れ、レシーブ仕損じた。アヤが驚きつつ、球を拾い上げる。一番驚いているのはオレだ。あんなサーブ、教えてない。

限られたレパートリーからつくりあげた、ハジメのサーブ。笑いながら、少し感心した。

健闘したものの、惜しかったのは初めの一セット目だけで、あとはあっさり叩き伏せられるハジメだった。

「ユウヤのばかぁ！ 勝てる訳ないだろ？」

「何言ってるんだよ、そんなの最初から分かってるから」

「恥かかせんなよ！」

アヤがラケットをしまいながら、

「でも、強くなってるだよ？」

アヤの言葉に慌てるハジメ。

「えっ、うえ？ ほんと？」

「うん、前は打ててなかったし……」

無意識に吐き出される毒にハジメが侵されていく。不憫な奴。

アヤと視線が合った。

「あのさ」

アヤの方から声をかけてきた。

「ん？」

かと思いきや、またうつむいてしまった。

「……なんでもない」

何か言う手前で、やめてしまった。

「……お前さ」

オレ自身が自分から言いかけて、少しの間黙ってしまった。言葉を捜す。アヤが見上げているのが分かった。

「しんどい時は、しんどいって言えよ？ 誰でもいいから」

「……なに、それ？」

またアヤと目が合うと、次にアヤが小さく笑った。無性に恥ずかしくなった。

「なにじゃねえよっ。もういい、何でもねえ」

「そっか……ありがと」

じゃあねと、アヤは部室から出ていった。

「何しに来たんだろううね？」

「……さあな」

なんとなく分かっていった。けどあいつは、逃げ出そうとする寸前で踏みとどまったみたいだ。

「おうお前ら、やってつか？」

騒々しくドアの音をたてながら、入れ違うように三神先生がやってきた。

「あれ、先生珍しいですね」

「ふつつつつ、私が何の用もなしに来ると思うか？」

「はい、暇そうですし」

先生がハジメのほっぺをつねった。

「ちよっ、せんせっ、これ体罰です！」

「ああん？」

「いったい！ ごめんなひやい、ゆるひて！」

上に持ち上げられてつま先立ちしながらひたすら謝るハジメ。

「次の大会が決まったぞ、今度は全員高校生だ！」

オレ達全員が感嘆の声をあげた。

「市の大会なんですよね？」

前回のこともあるため、細かいところまで確認しておかねば。

「ああ、規模は前以上だな」

「どうしよう、緊張するなあ……」

ハジメが意気揚々と、

「ようし、大会に向けて特訓するぞ！ 夕日ヘダッシュだ！」

「くさっ」

ケイ君がプリントをまじまじと見てから、気まずそうに声を出す。

「あの、中嶋君は出てくれるかな？」

少し間を空けてから、

「普段練習してないんだから出ないだろ」

冷たい気もするが、オレの考えをそのまま言つと、ケイ君は落ち

込むように目を伏せた。

「まあやる気ないならしょうがないんじゃない？」

ハジメも同意見のようだ。

「三人でがんばろうぜ。一つでも勝ち星をあげるのが、あいつへのはなむけになるんだよ。あいつの仇は、おれ達できっと……！」

「死んだみたいない方すんな」

その15（後書き）

学校で読むマンガってなんであんなに面白いんだろう。

その16

私の名前はハジメレラ。試合という名の舞踏会へ参加予定なの。
見慣れない道、いつもより早起きした朝。うふふ、小鳥さんはお
歌が上手ね。

ちゃりんこぎいぎい音をたて、坂道を越える。フルスロットル！
鞆をかごに押し込めて、もう一つは背中に背負って。あたしの情
熱とアンダルシアは、鞆一つじゃ収まりきらなかったみたい。てへ
っ。

到着したら自分へのごほうび、いちご牛乳買っちゃおう！

今日はなにやら特別なことが起きそうだね。

少し不安……でも大丈夫、星占いはうちりだったもん
らんらん気分でちゃりんこ飛ばすの。

見知らぬ道、いつもと違う時の流れ。やだ、もうこんな時間。あ
たしのばかばか！ ドジなお姫様なんだから。お城に着く前に魔法
が解けちゃうぞ！ 急がなきゃ、ユウヤお嬢様とケイ子ちゃんが待
ってるんですもの。

「道に迷ったあああああああああ！」

「あのバカ……」

携帯を切り、そう吐いた。

「ユウヤ君、どうしたの？」

「ハジメが迷子になったらしい」

「ええっ、間に合うの？」

「人に道聞いてどうにか間に合わせるってよ」

オレとケイ君は自転車で市民体育館に着き、館内ロビーで腰掛け
ていた。

「まったく、なんでこちらは毎回ともに合流できないんだ？」

「仕方ないよ、こっちに来ること滅多にないだろうし」

目の前で他校の生徒達が会場に入ってくる。いよいよ大会っぽく
なってきたな。ケイ君が口を半開きにして目を見開いている。参加
選手の多さに驚いてるように見える。

それは唐突に聞こえた。

「あれ橋本じゃね？」

そろそろと会場入りする集団の中から、オレの苗字が聞こえた。
人が来るようになってからずっと下向いてたのに、オレの名前、
なんだよ、やめてくれ、心拍数速くなってる、どうか行け……！

「どうしたの？ 大丈夫？」

「え？ ああ、うん……」

ケイ君が心配してくれてる。

「おい！」

入り口からハジメと三神先生がやってきた。

「わりいわりい、道わかんなくてよー。慌てすぎて一人メルヘンな
世界に踏み込みかけたぜ」

「何言ってるんだか。これで全員だな。……おい、橋本？」

三神先生がオレの顔を覗き込んできた。

「あつ、はい！」

「ぼけつとすんな、行くぞ」

三神先生を先頭に階段を上がり、通路を歩く。体育館のドアを開
けると、ハジメとケイ君が声を漏らした。

「うわ、広っ！」

「すごい、ここでばくら卓球するの？」

今オレ達のいる二階は観客席となっており、大量の席が並んでい
る。囲まれた形で、一階のフロアが見える。もうすでに卓球台が設
置され、他校の選手達が練習していた。

「あ、田所先生どこにいます？」

三神先生が携帯電話を取り出して通話し始めた。手短に話を済ま
せて電話を切った。

「よし、こっちだ」

三神先生に付いていくと、そこには無精ひげと眼鏡が目立つ男が一人と、大量に置かれた鞆が目に残った。

「おはようございます、三神先生」

「おはようございます。すみません、予定が少し遅れてしまいましたね」

「いえいえ、構いませんよ」

三神先生に倣ってオレ達も男に挨拶した。

「あ、この先生が女子卓球部顧問の田所先生な」

言われて、部活見学の時にアヤをしごいてた人だと思い出した。

「もううちの部員達はフロアで練習しちゃってますけど、台空いてなさそうですね」

田所先生につられてオレ達が下に目をやると、アヤ達女卓の面々がラリーをしていた。台が空いていようが、正直今は打ちたくない。とりあえずユニフォームに着替えた。

「えへへ、みんな同じっていいね」

三人と同じ新品のユニフォームを着ているのを見て、ケイ君がはにかんだ。

「やっと部活っぽくなってきたな」

ハジメも嬉しそうに答えた。

「まだ同好会だろ」

「……そうか、まだ部じゃなかったっけ！」

こいつは相変わらずだな……。

オレは席に座り、ケイ君は素振り、ハジメは下で打つアヤを凝視と、各々開会式を待つことにした。

「あ、ケイ君！」

開会式開始のアナウンスが流れ、フロアに下りると早々にケイ君が先輩達に見つかった。

「ケイ君も試合出るの？」

「はい！」

「キヤー！　がんばってね！」

「そこ、うるさいわよ」

部長の瀧野先輩に叱咤され、しぶしぶ謝る先輩達。瀧野先輩がこつちを向く。視線が、特にケイ君に対して強い気がするが、未だにオレ達を敵視してるのか……？

開会式はおざなりな開会の言葉で始まり、目次どおり進んでいった。途中で選手宣誓が行われ、聞き覚えのある声がしたように思えたが、あえて思い出さないようにした。うつむきながら、自分の意思に反して脳裏をよぎる過去を振り払った。

開会式が済み、選手たちが二階の観客席に戻っていく。女卓がオレ達の隣で、田所先生と瀧野先輩を中心にミーティングを始めた。それを三神先生がちらつと見た。

「よし、集合！」

三神先生に呼ばれ、全員集まる。

「あー、えっと……今回、初の高校生大会ということで、うん、その、なんというか……特になし、解散っ！」

せめてがんばれくらい言ってくれ。

「ユウヤ」

ハジメが声をかけてきた。

「ん？」

「今回は勝つぞー！」

「……ああ、そうだな。アヤに良いとこ見せないとだもんな」

「雰囲気台無しだろそれー」

ハジメをからかうと、少し落ち着いた。

その16(後書き)

てへっ
三

その17

今回も以前同様、団体戦、個人戦の順に進められる。団体戦の組み合わせは、一番手にハジメ、次にオレとケイ君のダブルス、最後にオレがシングルで打つことになった。フロアに下り、指定された台の前で整列する。恐る恐る相手チームの面々を盗み見た。知らない奴ばかりだ、胸をなで下ろした。

対戦相手と礼をし、対戦表を交換する。

「そんじゃ、ぱぱと勝ってくるわ」

ハジメが軽々と口にした。

「ああ、頼んだ。お前の勝敗によって一回戦を突破できるかどうか決まってくるからな。絶対負けるなよ」

「そんなにプレッシャー与えんなよお！」

打って変わって弱気な発言を残して、ハジメが台についた。台の向こうには眼鏡をかけた気弱そうな男の子が立っていた。

「よろしくおねがいしやーす！」

「よ、よろしくおねがいます」

ハジメに合わせて礼を返してきた。目が泳いでいる、落ち着きがないな。

ラリーを手短に終わらせ、試合が始まった。

ハジメが下回転サーブを放る。相手はツツキでレシーブしようとするが、ネットに引っかかり、あっさりと先制点を取った。二度目も同じバックスピンスーブ。どうやらあのサーブはものにしたようだ。レシーバーのツツキはまたもネットにぶつかり、球が台の上に転がった。

「すごい、二点連取！」

ケイ君もオレも驚いてるが、一番信じられないといった顔をしてるのは本人だった。小学生相手にスコנק（一点も取れずに負けること）かましてたんだ、そりゃ驚くわな。

サーブ権が移り、今度はハジメがレシーバーとなる。相手はハジメ同様、バックスピンのサーブを打ってきた。ハジメお得意のツツキでつなげる。何度か互いにツツキを続けたあとに、相手が打ち損じて失点した。

サーブ、ツツキ、相手のミスの繰り返しで、まさかの三セット先取。ハジメ初勝利を飾った。

「勝った！ 勝った？ 勝った！」

「興奮しすぎだ」

「ハジメ君すごいよ！ やったね」

「自分でもびつくり。なんで勝てたのか分かんねえし」

「んなもん、向こうが初心者だからだよ。相手がミスしてばっかだったろ？ 基礎がまだ固まってないようなド素人。運が良かったな」

「勝ちだ、イエーイ！」

前回の大会の方が、全体のレベル自体は高い。というのも、この近辺で高校生を対象にした大会は今年度ではこれが初。今年入学した奴はこれが初出場ってわけだ。出場者の半数近くであろう一年生なんて、高校入学と同時に卓球始めた面子か、良くて中学から続けてやってますといった連中くらいだ。中学からの経験者はそれなりに手強いだろうが、最近までの部活内の練習メニューなんて、球拾いと素振りくらいで、実践的な練習なんかほんのわずかだったろうから、めきめきと実力をつけてきたなんてこともないはず。吸収力の高い時期にずっと卓球してる子供と、経験を何重にも積み重ねてきた大人が参加してた前回の大会の方が、全体の質が高いのも当然。ハジメやケイ君ら初心者が勝てるわけなかったんだ。だが今回は違う。二人ともみっちり練習してきた。少人数だからこそ付きっ切りで教えられた。こんな生半可な奴らに負けるわけがない。

「ゲームセット」

オレのサービスエースでダブルスが終わった。シングルスとダブルスで二連勝したため、一試合目はこれでオレ達の勝ちとなった。

「ユウヤ君すごい！」

「決めてやったぜ」

チーム同士礼を交わし、大会本部に結果報告を伝えてから観客席に戻った。

「団体戦初勝利だな。やったじゃん」

三神先生が笑いかけてくれた。

「ま、こんなもんっすよ」

「調子に乗るなハジメ」

二回戦までの間、席について待機することにした。見下ろすと、女卓の試合が見えた。ちょうどアヤが打っている。どうにか踏ん張ってるみたいだな。

「おいユウヤ、アヤちゃんをガン見か？ 気のないふりしといてそういうことだったのか？」

「どういうことだったっーの」

「二人とも不純だよっ！」

ケイ君が走り出した。

「ちょ、待て！ ハジメツ、追いかける！」

「ケイ君今日は帰っちゃだめええええ！」

二人がかりでどうにか制止させた。

「二回戦始まるっばいぞ」

「もうそんな時間か」

本部の指示どおりに台へ向かう。タイミング良く相手チームも到着したようだ。ふっと、目をやった。

目が合った。見覚えのある顔。響いていた卓球の打球音が鳴り止んだ、オレにはそう感じた。周りの人や背景が止まった、あいつ一人を除いて。

ハル……？

「気をつけ、礼！」

「……よろしくおねがいしあーすっ」「……」

ハジメ達や相手チームが号令に合わせて礼をする中、オレ一人茫然と立ち尽くしていた。ハジメが相手の代表者と対戦表を交換する。なんで、あいつが……？

「ユウヤ君、こっちだよ？」

ケイ君が声をかけてくる。聞こえてはいた。いや、耳がかるうじて声を拾い上げ、頭の片隅にうつすらと流れてすぐに消えていく。そんな感覚が、ハジメにラケットで小突かれるまで続いた。

「おーい。どうした？」

目の前のハジメの声で、視界のピントが元に戻った。

「お、おう。なにしてんだよ、さつさと試合してこい」

「人の邪魔しといてひどい言い草だな」

とりあえず台から離れることにした。

ハルが台の奥で試合を観戦してる。視線をはずそうとしても、いつの間にかあいつを視界に入れてしまふ。ハルはオレを一切見ようとせずに応援をしたり、同じく観戦する隣のチームメイトと何か喋っている。

オレは今、夢を見ているのではないだろうか？ 他人のそら似で、全くの別人ではとも考えた。が、違った。交換した対戦表には二番手ダブルスの欄の一つに、宇都宮春樹と書かれていた。同姓同名で顔がうり二つなんて、ありえない。

ハジメが横回転サーブを打つ。オレが教えた三つ目のサーブだ。まだ回転が甘いが、サーブの種類は多ければ多いほど良い。相手は回転に合わせながら、ハジメの台の奥深くに打ち込む。ぎりぎりのところをハジメが打ち返す、いや打つと言うより無理矢理ラケットを当てたに近く、球は高く浮いてしまった。台に着地することなくアウト。ハジメが負けた。

「負けたあ！ くっそ、二人とも頼んだぞ」

ケイ君がハジメに笑顔で頷いた。

「頑張ろっね、ユウヤ君」

「うん……」

「……ユウヤ君？ 大丈夫？」
「うん……」

その17（後書き）

自分の試合直前にも関わらず気配りできる余裕がほしいものです。

その18

オレはこれから本当にハルと打つのか？ もう二度とこんなことないと思ってた。ハルとそのパートナーが台についている。台に向かわなきゃいけないのに、足が上手く動いてくれない。

ラリー開始。ハルから球が打ち出された。打たなきゃ、そう思うと体が萎縮してしまう。かろうじて返球し、そこそこにラリーを終わらせた。

「ラブオール」

ハルの相方がサーブの構えをする。頼む、打たないでくれ。始めないでくれ。

そんな願いも届かず、サーブが放られた。レシーバーのオレは、ツツキをハルとは逆サイドの台の浅い箇所へ送る。だがハルは即座に腕を伸ばし、次にはフリック（台上で球を払うように打つこと）で球をケイ君側の台の奥に突き刺してきた。反応しきれず、球が台にバウンドしてそのままケイ君の体に当たった。

「ワンラブ」

心の片隅で、わずかな可能性を信じていた。同姓同名、うり二つの別人という、天文学的な数字の希望にすがっていた。現実味の無い、願望と言っても良いものを自分勝手に肯定していた。だが果た今、その可能性が潰えた。前人速攻の攻撃型。初球だというのに、いや初球だからこそ効果のある威圧的、挑戦的な球の軌道。何より、普段の温和な瞳から豹変する、打球時の鋭い眼光。間違いない、あいつはオレの知っているハルだ。

あいつは、オレが殺したハルだ。

べたべた。

腕に何かが粘りついている。

だがそれを直視できない。怖いんだ。
体育館にいる。

遠くでアヤがオレを見ていた。

助けてくれ。

何故かそうつぶやいていた。だがアヤの耳には届かない。
アヤに手を伸ばした。

そこで初めて、自分の腕が見えた。
赤。

べたべた。

なんだよ、これ。

足を何かがつかんだ。

反射的に視線を下に移す。

ハルだ。

頭から赤い液体を被ったかのようなハルが、オレの足に。
べたべた。

飛び起きた。荒い呼吸と汗ばんだ体が、ひどく陰鬱な気分にな
した。

「大丈夫か？」

三神先生がオレの肩に手を添えながらそう訊いた。

「先生……？」

「お前、試合中に気失ったんだぞ？ 覚えてるか？」

「先生っ、ハルは？」

「……なんのことだ？」

真剣な表情のまま、オレを見つめ続ける三神先生。

「試合は、どうなったんですか？ ここは……？」

気づくと白いベッドの上だった。

「病院だよ。すぐ救急車を呼んだ」

「会場につ、会場に戻して、早く！」

喰い気味に頼み込んだ。

「なに息巻いてんだ？ 戻ってももう意味ないぞ？」

三神先生が自分の腕に着けている腕時計を見た。窓の外は日が暮れようとしていた。

「戸田と牧野は田所先生が面倒見てくれてるから心配するな。あと、親御さんに連絡させてもらったからな。もうすぐ来てくれる」

「……そう、ですか」

しばらくして診察室に連れて行かれた。オレは本当にハルと打ち合ったのだろうか？

その18（後書き）

文章量としては、この時点で半分と少しといったところです。

その19

「ユウヤ、辞めんのかなー？」

「分からないけど……」

ハジメ君が部室に寝転がりながら、しばらく黙り込みました。

「……どうしたんだろうね？」

「さあ？ 大会出てからメール返さないし電話出ないし、変だよ。
三神先生が言うには、倒れた原因はケガや病気とかじゃないらしい
し」

「……お見舞いに行かない？」

「やめておこうぜ。あいつの性格からして、そういうデリケートな
部分に触れて欲しくないと思うんだよ」

「そっか……」

「てか超あちい！ 夏あちい！」

「うん、汗でびしょびしょ」

「もう無理、今度はおれ達が倒れるっ！」

「練習終わりにする？」

「だな、そろそろ昼だし。てか、夏休み中はもういいんじゃない？

ユウヤ来なきや練習しようがないだろ」

「え？ ……うん、そうだね」

ハジメ君が制服に着替え始めました。

「各自、素振りや体力づくりを怠らないように！ あ、今おれ部長
つぼくね？」

「あはは、ほんとだ！」

「まあおれが一番に自主練しなさそうなんだけどねー」

「ええー？ 練習しなきゃだよー」

ハジメ君はいつもぼくやユウヤ君を冗談で笑わせようとしてくれ
ます、一緒にいて楽しいです。

「で、ケイ君はまだ帰らないの？」

「あ、うん。もう少し残ってようかな」

「そか。じゃあおれ、バス乗るわー」

「うん、分かった」

「またメール送るから、百通くらい送るからー！」

「あははっ、送りすぎだよー」

手を振って、ハジメ君が部室から出て行きました。少しして、体育館と学校棟をつなげる渡り廊下を女子卓球部の人達が通っていくのが見えました。みんなちよど練習が終わったようです。

部室にぼく一人が残りました。自主練開始です。

ぼくらが使っている台は、二人分の障地が別々になっているもので、二面を繋げて一つの台になります。片方の面を端から持ち上げて垂直に立ってます。もう片方は通常どおり地面と水平にし、垂直の面と直角に合わせます。あとはネットを張れば準備完了です。

台につき、サーブを打ちます。ぼくのサーブが垂直に立つ台に当たり、すぐ跳ね返ってきました。それを打って、また球が跳ね返り、またそれを打っての繰り返しです。一人でラリーができるのです！ユウヤ君に教えてもらいました。テンポを崩さないよう、冷静に正確に。卓球の音って、なんだかきれいですよね。リズムカルに打てたら、とても嬉しいです。

一人で練習し始めてから一時間も経っていました。お弁当を持ってきてたので、少し遅めのお昼にします。タコさんウィンナー！お腹いっぱいになったので練習再開、次はサーブです。通常どおりに台を設置し、狙う位置に空き缶を置きます。

ていつ！

ていつ！

なかなか当たりません……。

一向に当たらないので、空き缶をもう二つ置きました。

ていつ！

ていつ！

あっ、当たった！ 狙ってなかった方の缶に当たった！ ……ま

だまだ練習が足りないようです。

日が暮れてきました。早く片付けないと。その時、上履きで廊下を歩く足音が聞こえたような気がしましたが、こんな時間に人がいるわけですね。

家に帰って、ご飯を食べました。エビフライおいしかったです。

お風呂は長湯して少しのぼせてしまいました。机に向かって宿題をします。七月中に終わらせられるように頑張ります。少しテレビを見て、ベッドに入りました。おやすみなさい。

次の日も、練習をするために部室に行きました。今日は最初からぼく一人です。準備運動を入念にして、素振りをします。フォアハンド、バックハンド。素振りをする時は相手を想像しながらラケットを振るようにしています。実践のような緊張感が生まれる気がします。気がするだけな気がします。

「一人で練習してるの？」

部室のドアが開けられました。反射的に視線を移すと、その人と目が合いました。

「た、瀧野先輩？ ど、どうしましたか？」

女子卓球部部長の瀧野先輩でした。

「大声出すことないでしょ？ 他のメンバーは？」

「ハ、ハジメ君もユウヤ君も今日は来てないです、自主練ですっ」

「ふーん」

体育の授業用の短パン、半袖姿の瀧野先輩がじつとぼくを見つめました。どうしよう、どうしよう……！

「……じゃあ、練習相手になってあげるわ」

「……？」

聞き間違いかと思い、その場に立ち尽くしているぼくに瀧野先輩が、

「なにぼさつとしてるの？ 早く台につきなさい」

「は、はいっ」

「まずはフォアハンドからよ」

そう言い、瀧野先輩が軽く球を出してくれましたが、返球し損じました。空振りです……。

怒られる！ そう思い、怖くなって咄嗟に目をつぶってしまいました。

「ドンマイ、次打つわよ」

瀧野先輩が優しくフォローしてくれました。ゆっくり目を開きました。

「……はいっ」

次はちゃんと打ち返せました。瀧野先輩が打ちやすく返してくれたので、安定してラリーが続きました。

「うん、上手くなったじゃない」

「そんなっ、こと、ないですよ？」

瀧野先輩が褒めてくれた！ 褒めてくれた！

しばらく打ち続けたので、お昼休憩をとることにしました。先輩と一緒に自動販売機でパンとジュースを買いました。

「そっいえば、今日は瀧野先輩、女子卓球部の人達と練習してたんですね？」

部室の床に腰を降ろしながらそう訊くと、何故か瀧野先輩は、

「え？ ええ、そうだけど、ど、どうして？」

瀧野先輩が持っていたパンを落としそうになりました。

「ぼくの練習に付き合ってくれて良いんですか？ みんな待ってるんじゃない……」

「良いのよ。えと……そう！ 今日はもう練習が終わって、解散したの」

「そっなんですか？ 誰も見かけなかったけど」

「ほら、そろそろ練習するわよ！ ラケット持つ！」

「あ、はいっ」

やっぱり、人と打つのは楽しいです。いつの間にか夕焼け空になっていました。瀧野先輩が最後まで相手をしてくれたので、昨日以上に時間の流れが早く感じました。

部室に鍵をかけ、瀧野先輩と一緒に鍵を職員室に返しに行きました。職員室までついてきてくれるなんて、瀧野先輩は本当に優しいです。

「三神先生、鍵を返しに来ました」

「はい。あんたも一人でよくやるわね」

「今日は一人じゃなかったんです、瀧野先輩が」

「まっ、牧野君！」

呼ばれ、振り返ると瀧野先輩が廊下から顔を覗かせていました。

「私のことは言わなくていいから」

すると三神先生が、

「あれ？ 瀧野、今日は練習ないん」

「ええっ？ なんですか、聞こえないです！」

瀧野先輩が大声で聞き返しました。三神先生の声搔き消すほどの声でした。

「……牧野、お前も隅に置けないな」

三神先生が、なんだかこそばゆそうな笑みを浮かべながらぼくを見つめました。

「え？ どういう意味」

背中に気配、いつの間にか瀧野先輩がぼくの背後に立っていました。

「おいこの年増、牧野君に変な入れ知恵すんなやゴラ」

「あ？ 誰が年増だあ？ お姉様と言い直せば許してやんよ」

「私がお姉様と呼ぶのは教会のシスターだけじゃボケ」

「シスター違いやがな」

怖いよお、二人とも映画とかに出てくるやくざさんになっちゃったよお……！

瀧野先輩と同じバスに乗りました。一番後ろの席で一人分間を空けて座りました。

「瀧野先輩って卓球上手ですよね」

「そんなことないわよ、ただ好きなだけ」

「でも、好きなものを好きって言えるのって、すごいと思います」

「ええ？ 普通よ」

瀧野先輩がぼくを不思議そうに見ました。

「……牧野君は、中学の頃から卓球をやってたの？」

「いえ、高校に入ってからです」

「どうして卓球？」

「うーん……」

ぼくは口下手なので上手く説明できるか少し自信がなくて、でもちゃんと説明しなくちゃと考えながら、

「ぼく、中学生の時はなんとなく人が多い部に入っただけですね。昔からあまり自分の意見を出さない性格で、その、人に流されることが多かったんです。でもそれじゃいけないと思って、自分から動く」

「それで、卓球？」

「はい、同好会設立のポスターを見て、一から何かを創れたらすごいなって思っただけです」

「ちゃんと自分で考えて行動してるんだからえらいよ」

「まだまだ下手ですけどね」

冗談交じりにそう言いました。

「そんなことないし、今も真面目に練習してるじゃない。明日も学校で自主練するつもり？」

瀧野先輩にそう質問されました。

「はい、せっかく覚えたことを忘れたくないんで」

「……」

瀧野先輩は返事をせず、しばらく黙りました。何か言っちゃいけないこと言っちゃったかな？

「じゃあ……」

「は、はい」

沈黙のあとの言葉を、緊張しながら聞き入りました。

「明日も部活が早く終わったら、相手してあげるわ」

また瀧野先輩と打てる！

「はい、お願いします！」

瀧野先輩の顔を見返しながら返事をしました。瀧野先輩は驚いたのか、顔をうつむかせてしまい、前髪で表情が見えませんでした。

バスの小さな揺れと瀧野先輩とのおしゃべりが、なんだか心地良かったです。瀧野先輩の笑顔を初めて見ました。すごく、かわいかったです。

その19（後書き）

ニヤニヤ。

その20

「またメール送るから、百通くらい送るからー！」

「あははっ、送りすぎだよー」

手を振ると、ケイ君が手を振り返してきた。部室をあとにする。下駄箱で靴を履き、外に出る。校門に向かいながら、ユウヤのことを考えていた。

このまま放置したらぜってえ辞めるな。おれだったら来づらくなるし。かと言って変に首突っ込んでもなあ……。とにかく事情を理解しないと手の出しようがない。じゃあ、どこで情報を？ うーん……。

校門を抜け、バス停に立ちながら頭中でぐるぐる考えるけど、良い案が出ない。そんな内にいつの間にかバスが目の前に停車した。乗り込み、後部座席に座った。

ドアが閉まるうとする直前に、別の乗客が滑り込むように乗ってきた。二人の、おれと同じ高校の制服を着た女の子。てか、アヤちゃんいるじゃん！ ええ？ やばい、なんか緊張してきた！ 部活帰りか？ やっぱかわいい。

まずい、こっちに来る！ 向こうがおれに気づく前に顔を伏せた。おれの二つ前の座席に二人が座った。よし、やり過ぎたみたいだ。アヤちゃん今日は髪を後ろで結んでる。うなじが、うなじがああああ！

落ち着けおれ。こんな偶然滅多にねえんだ、今日こそアヤちゃんとの接点を作るチャンスだろ。とりあえず隠れてしまった以上、不自然な行動に出るのはアウトだ。プロは百パーセントの安全を確保してからアクションを起こす。焦って全てをおしゃかにするのは三流のことだぜ。ここは冷静に様子を窺うことにしよう。あれ？ おれ、さっきまで重要なことで悩んでた気がするけど……ええい、そんなことどうでもいい！ おれは今できることにベストを尽くす

ぜ！

どうやらアヤちゃんと一緒にいる女の子は同じ一年生のようだ。校章やネクタイの模様の色が垣間見える。部の仲良しペアで帰宅つてとこか。

問題はアヤちゃんにどうアピールするかだが、友達という以上、二人の時間を奪うような真似したくない。実際、楽しそうに話してるなあ。会話を盗み聞きしたりはしないけど、ちよくちよく声あげて笑って、前におれらの部室に来た時と全然違うね？

「……そういえば……アヤ専用の練習………なんで……」

「……私が……やめてくださいって……先生も分かってくれて……」

……」

途切れ途切れではあるものの、聞こうとしてないのに二人の会話が耳に入ってきてしまう。ダメだ、盗み聞きなんて最低だろ！

「じゃ、またねー！」

途中のバス停でアヤちゃんの友達が降りた。うおお、これは話しかけるチャンスか？ え、ちょっと待て、おれとアヤちゃんの共通の話題って……卓球？ あんま詳しくないぞ？ 下手したらそんなことも知らずに卓球してるの？ って幻滅される可能性も……。どうしよう、嫌な汗が出てきた。ここはあえて、卓球以外の話題だろ。

『好きな曲なにー？』

『……ないかな』

『休みだしどつか出かけるの？』

『別に……』

『そうなの？ おれ今度友達と海行くんだ！ 結構泳ぎ得意なんだよ』

『ふーん』

だめだあ！ この前話した時と同じ雰囲気だと、間違はなく無関心な答えしか返ってこねえええええ！ 一人延々と喋るだけか？

おれ超うざいだけじゃんっ！

……やっぱここは卓球のことを、初めてアヤちゃんを見た時のことを話そう。部活見学の日、ユウヤがなにを見に行つたのか気になつて二階に上がつて、先輩相手に打ち勝つ、格好良くてかわいいアヤちゃんを見つけた時の、あの感情を伝えよう。

席を立つた。アヤちゃんの座席まで、一步、二歩……あ。

音はたてずにダッシュで引き返した。あつぶねー！ アヤちゃんヘッドフォンつけて外眺めて、めっちゃ一人の世界入ってたー！ 目に見えない分厚い壁あつたよぜってえ！ てかイヤフォンじゃなくteごついヘッドフォンとか、すんげえ意外、かわいいなちくしゅう！

しどろもどろしてる間に駅に着いちまった。アヤちゃんがバスから降り、駅の中へ入っていく。だがおれは至つて冷静。なぜならアヤちゃんとユウヤは小学校からの幼馴染。それすなわち住んでる場所もそう遠くないはずだから、ユウヤと同じ方向の電車にアヤちゃんも乗るはず。ならおれも途中まで同じ電車だから、車内で話しかければオールオッケイ！ 完璧だ、つけ入る隙がないぜ。

改札を抜けると、ホームに立つアヤちゃんが見えた。アヤちゃんが車両に入っていく。よし、あとは同じ車両に乗つて、偶然を装つて話しかれば……。

自然に、電車に乗り込んだ。ちよつと下向いて携帯いじりながら、今どきの平凡な少年として何食わぬ顔で……さあ、ここでふつと視線をあげればそこにアヤちゃんがつ！

目の前に、大勢の人が立ち並んでいた。あれ、アヤちゃんどこ…

…？ 満員電車とは予想外でした。

その20（後書き）

ハジメ視点その1。ちなみに私はうなじ好きではないですよ。……
本当だ信じてくれ！

その21

ドアが閉まり、電車が発進した。まだだ、諦めるにはまだ早いぜ……。アヤちゃんがこの車両にいるのは確かだ。車内を捜せば絶対いる。人と人の隙間を縫って歩く。せまい、若干押し広げるように道を開ける。

その時だった。

「この人痴漢ですっ！」

スーツを着た女の人が甲高い声でそう叫んだ、おれの手をつかんで掲げながら。乗客の視線が一斉におれに集まる。

はあ？ はあ？

「ちよつ、違います、おれ痴漢じゃないっす！」

「ふざけんな、お尻触ったじゃないの！」

「触ってねえ！ 片手で鞄持って、片手で道開けて、どう触るっつうんだ！」

「子供なら何してもいいとでも思ってたんの？」

「だから、違うつつの！」

まずい、騒ぐなつて！ 他の人めっちゃ見てるじゃん！ 身の潔白を誰か証明してくれないかと、周りを見回した。みんな怖い顔してるし、誰か……あつ。

目が合った。その人はおれが追いかけていた、憧れていた、アヤちゃんだった。席にちょこんと座っている。

あああああああああ！ 一番見られたくない人に見られたあああ！ アヤちゃん誤解だ、おれは無実なんだっ！ ……もう終わった、こんな変態に誰が振り向くんのだ。

ユウヤも卓球辞めそうだし、いつそのこと別の部でも創ろうか。

そうだなあ……枕投げ部！ これだ、枕投げで全国を目指す！

「あの、その人痴漢じゃないです」

くらえ、低反発シュートオ！ 凄まじい威力だ、おれはなんて恐

ろしい技を編み出して　ええええ？　アヤちゃん、今なんて？
現実逃避してる場合じゃねえ！

「私見てましたが、あなたの体に当たってたのは、後ろの人のバッグでした」

……なんだって？

おれとスーツ姿の女が振り返る。見ると、若い女性が大きめの革製のバッグを手にしていた。服越しとはいえ、手のひらとバッグの柔らかさを間違うか？

「……ごめんなさい、私てつきり！」

さっきまで騒ぎ立てていたスーツ姿の女が頭を下げた。電車がちようど停車し、ドアが開いた。

「あ、いえ、気にしないでください」

助かった、アヤちゃんのおかげで誤解が解けた。アヤちゃんの方を向く。だがさっきまでアヤちゃんが座っていた席には、別の乗客が腰掛けていた。ドアが閉まり、電車が動き出した。

家に着いたら昼の十二時半になっていた。鞆を置き、ラフな格好に着替えた。冷蔵庫から冷えた緑茶を出し、コップに注ぐ。一気に飲み干した。

ありがとを言えなかった。アヤちゃんのおかげでどうにか済んだけど、下手すりゃ警察沙汰だったよな？　お礼を言わなきゃ。けど、次話せるのっていつになるんだ？

携帯のアドレス機能から、ユウヤの番号を選択した。電話をかけるものの、一向に出ない。

うーん、他にアヤちゃんの携帯知ってそうな人に聞いたら、変にちゃかされそうでやだな。でも他に連絡先なんて……そうだ！　クルスの連絡網に家の電話番号が……あった！　見つけたものの、電話するのこええええ！　落ち着いて深呼吸して、番号を押す。冷や汗出てね？　大丈夫、いきなりコクるとかじゃないんだから。

トゥルルルル、トゥルルルル。

ドクンドクン、ドクンドクン。

「はい、霧島ですが」

誰か出た。アヤちゃんじゃない、男の人だ。

「あ、あのっ、おれ、同じ高校の戸田というんですが、アヤさんはいらっしやいますか？」

何故か相手は返事をせず、しばらく黙り込んだ。数秒だったのかもしれないが、おれにはひどく長く感じた。

「俺はアヤの兄なんだけど、悪いがまだあいつ帰ってきてないんだ。もしかして君、アヤの彼氏？」

「いいえっ、まだそんなんじゃない、あ、いや、まだ何もありませんですけど！」

ぎゃああ、何言ってるんだ！

「その、今日電車の中で、おれが痴漢に間違えられたのをアヤさんに助けていただいて、そのお礼が言いたくて電話しました」

必死に言葉をつなぐ。すると相手はまたも黙り続けてしばらくしたあと、言葉を返してきた。

「……良く分からないけど、話があるなら直接相手に言ったほうが良いと思うんだが、違うか？」

「いいえ、そのとおりですっ」

「じゃあ、今日にでも家に来な。アヤも待ってるから」

家の住所を教えてもらい、電話を切った。切る寸前、受話器越しに含み笑いが聞こえた気がしたが、そんなわけない、聞き間違いだろう。

携帯を置き、胸を撫で下ろした。ふう、どうにか済んだ。アヤちゃんのお兄さんがいい人で良かった。手はずを整えてくれて、本当に感謝しないとな。

午後三時、暑さ最高潮の時間。アスファルトが太陽に焦がされる。おれは門の前に立ち尽くしていた。教えられた住所に指示どおりの時間に。アヤちゃんの家は外壁が白くきれいなのと、公園のブラン

コが置けそうなほど広い庭があるのが印象的だった。なかなかのお金持ち？

インターホンが、押せませんっ！ すんげえ緊張、暑い以外の理由で汗ダラダラ。礼儀正しく制服とかの方が良かったかな？ 普段着のジーパンとＴシャツ着てきちゃったけど……。いいや大丈夫、この服はおれのタンス内ランキングでも一位二位に君臨するエリート。何度もこいつらには世話になったんだ、趣旨がずれている気もするが、いけるはず！ それに安物だけど、箱に入ったお菓子も買ってきた、マナーは守れてる。ポテチとか以外のお菓子買うのなんて初めてだ。そういうや人の家に訪問するときは相手を急かさないように少し遅れていくべきとか聞いたことあるけど、時間どおりの方がよくね？ 礼を言う立場で遅刻とか態度悪くね？ どっちにすりゃいいんだああああ？

よし、もうインターホン押しちまえ！ ずっと人ん家の前に立ってたらそれこそ勘違いされる。指震えるんじゃない、根性見せるや！ 指を前に突き出そうとしたその時、門の奥のドアが開いた。

「あ、違うんです、怪しいものではなくて、今日こちらに来る約束をしていた者です！」

咄嗟に頭を下げ、まくしたてた。相手の反応がない、そろりと見上げた。そこにはおれより年上であろう男が立っていた。上はタンクトップで、下は短パンを履いている。ガタイが良い、アヤちゃんのお父さん？

「あの、もしかして電話に出て下さった方ですか？」

「……おう、おれがアヤの兄貴だ」

この人がアヤちゃんのお兄さんか。ゆっくりとこっちに近寄ってくる。

「そうですか、今日はこのような機会をつくっていただきました本当に」

アヤちゃんのお兄さんはおれの言葉を遮って、野太い声を吐き出した。

「てめえがアヤを付け狙う痴漢野郎か、殺す！」

なんか勘違いしてるうつうつ！

「あの、そうじゃなくて」

「問答無用っ！」

おれ目掛けて門越しに拳を突き出してきた。しゃがんで避けたものの、頭のとっぺんかすりしましたよ？

「避けんなよ、殴れねえだろ？」

まずい、目が本気だ。

「違うんです、お兄さん落ち着いてください！」

「てめえに兄呼ばわりされる覚えはねえっ！」

アヤちゃんのお兄さんが門に手をかけた瞬間、おれは全力で走り出した。

その21（後書き）

ハジメ視点その2。

この話から1年後、ハジメ率いる枕投げ部が考案した投法「トップオブザテンピュール」がアメリカ代表に猛威を奮い、世界大会を制したとか制さないとか。

その22

携帯が鳴った。ディスプレイを開くと、ハジメからの電話だった。鳴り続ける携帯をじっと睨む。しばらくして鳴り止み、画面は十二時半を表示するだけとなった。

ベッドに横たわった。クーラーの小さな誹風音と、見てもいないテレビの音だけが自室に立ち込める。

夏休みの宿題しねーとな。

机の横にかけた鞆を開くと、各教科の問題集やらプリントやらが溢れ返っていた。外に取り出さずに指でいくつかめくるも、嫌気が差してすぐに鞆を元に戻した。またベッドの上で仰向けになった。いつもなにやっていたっけか。去年は受験勉強してて遊べなかったけど……。卓球ばっかやってた気がする。タケシ先輩が声かけた卓球の練習会に出させてもらったり、ハルとか他校の同い年を集めて試合してたっけ、そういえば。

腹減ったな。一階に下りると、母さんが台所に立っていた。

「お昼そうめんでいいよね？」

「また？ 飽きた」

母さんがむすつとしながら振り返った。

「……じゃあおそばは？ うどんは？ 冷やし中華にする？ 具なしだけど」

「……麺ばっかじゃん」

「じゃあ自分で作りなさい」

「へいへい」

冷蔵庫を開ける。バター、醤油、めんつゆ、キャベツ、冷やし中華の麺……。ろくなものがない。

「買い物してないの？」

「だって、外暑いんだもの」

呆れてため息が出た。

「頂いたそうめんとかあるし、いいでしょ？」
いいわけがない。

玄関のドアを開けた。熱気が全身に襲い掛かってきた。
太陽がアスファルトを焦がす。すぐそのコンビニに行くだけで
汗が流れた。

コンビニの中に入ると一気に冷たい空気がオレを包んだ。ああ、
天国だ……。

少し雑誌を立ち読みしたあと、弁当の置かれた棚に向かった。が、
棚は見事に空っぽ。しまった、昼時によくある品切れだ。のんびり
してる場合じゃなかった。

自動ドアが開く音がした。特に気にせず、どうしようか立ち尽く
していた。ここらへん、他はファミレスくらいしかねえしなあ……。
「ねえ」

後ろから声をかけられた。

「うお、なんだよ？」

アヤだった。こいつはいつもいきなり現れやがって。制服を着て、
肩に鞆をかけ、片手に紙袋を持っていた。

「弁当買いに來ただけ」

棚の前に突っ立つオレが邪魔だと言いたいらしい。どいて棚を見
せてやる。

「……ないね」

「お前、昼飯いつも弁当なの？」

「今日は親が出かけてるから」

オレとアヤは割と家が近く、この辺りの地理も同等に頭に入っ
ている。

「ファミレス行くけど、一緒に行く？」

「んー、いいけど」

すんなりオレの提案に応じた。まったくそ暑い外を歩くと思うと気
が滅入った。

「部活帰り？」

冷房のきいたファミレスでオレはジンジャーエールを、アヤはウーロン茶を飲んでいた。

「うん」

「その袋も部活で使ったの？」

「帰りに買い物してきた。ワンプ」

「ふーん」

氷がからからと涼しげな音をたてる。

「そっちはどうなの？」

「なにが？」

アヤに質問し返した。

「……ううん、なんでもない」

卓球のこと訊いてるんだよな絶対。分かってる、分かってはいる。注文したメニューが届いた。バジルスパゲティをフォークに巻きつけ、口に運ぶアヤ。それ以上踏み込んだ話をしてくる様子もない。オレも自分が頼んだハンバーグを食べ始めた。

大した話はしなかった。オレがそれ以上訊くなオーラを出していたのかもしれないが、クラスの話とかどうでもいい会話しかなかった。

「ユウヤアアアアア！」

ファミレスのガラス窓の外から、オレの名前を叫ぶ声が聞こえた。驚いて振り向くと、顔を窓に貼り付けてこちらを凝視するハジメがいた。

「……お前、まさかオレを同好会に連れ戻しに」

「ちげえから！ まじ助けて！」

ハジメの後ろから、別の声が聞こえた。ごつい。

「まあてえええええええ！」

「お兄ちゃん？」

アヤの反応どおり、声の主はタケシ先輩だった。全速力でこちらに向かってくる。

「ぎゃあああ！」

ハジメが猛スピードで逃げていった。何が起きてるんだ……？

「アヤ、わりい。会計しといて！」

金を財布ごと置いて、一人店を飛び出した。

二人が通っていった道を追いかけてみたが、とつくに見失っていた。闇雲に走る。あの温厚なタケシ先輩が鬼の形相で追いかけてたんだ、相当まずいのは確かだ。

十字路に差しかかる。くそ、どっちだ？

「ユウヤっ！」

右方向からハジメの声がした。どこで入れ違ったんだか。目の前に止まり、息を切らすハジメ。

「お前なにしでかした？ 怒んねえから言えボケエ！」

「もうすでに怒ってるじゃんか！」

その時、地鳴りのような音が近づいてきた。振り返る。

「見つけたあああああ！」

げっ、タケシ先輩！

タケシ先輩が全身をつかって跳躍した、ハジメに向かって飛びかかってくる。もう、ダメだ……！

「お兄ちゃんストップ！」

アヤの声。叫び声が遠くからした。次には何かが落ちてこすれる音が重々しく聞こえた。身構えていたオレとハジメが恐る恐る目を開くと、タケシ先輩が砂埃をあげながら地面に突っ伏していた。

アヤが駆け寄ってくる。

「アヤ、お前なにしてんだ？」

「お兄ちゃんこそなんで、この、ええと名前……」

「ハジメだっつて」

オレがフォローした。ハジメはショックを隠そうと顔をうつむかせた。

「そっ、なんでハジメ君を追いかけてるの？」

「ハジメ君？ え？ だってこいつはアヤを狙う痴漢でストーカー

で変態で、害虫でしかなくず野郎だろ？」

イメージが最低すぎる。

「あの、何か勘違いされてるようですが、おれは痴漢に間違えられたのをアヤさんに助けて頂いた者です」

タケシ先輩がぽかんと口を開いて、思考が停止したかのようになった。が、アヤが睨んでいるのに気づいて、一瞬身震いした。
「すまなかった！」

その22（後書き）

昔冷蔵庫に何もなくて、賞味期限の切れた冷やし中華にきゅうりだけのせて食べたことがあります。虚しさがハンパない。

その23

部室の鍵を開け、中に入る。八月朝の部室は熱気が立ち込めており、窓を開けると鬱陶しく張り付いてくるような生暖かい空気が入り込んできた。

体操着に着替えて、ラケットを取り出した。ラバーを貼り付ける。ラケットの準備すると、これから卓球するって感じがする。やっぱり落ち着く。

「ういっす」

ハジメがやってきた。

「あゝっゝいゝ」

「練習する前からそんなんでどうするんだよ？」

「職員室行かね？ 冷房ガンガン！」

「お前何しに来たんだ？」

またドアが開いた。

「ういーす」

「あれ、タケシ先輩？」

「ええ？ どうしたんですか？」

今日はオレとハジメの二人で練習する予定だった。この前の騒動のあと、二人で話でもしながら卓球する約束をしていたんだが、タケシ先輩、オレ達の話聞いて来たのか。

「ちよつくら打たせてもらうぞ」

「いや、いいんですけど、受験勉強とか大丈夫なんですか？」

「ああ、俺もう進路決まった」

「ええ？ まだ八月なのにですか？」

「一般入試以外にもやり方はあるんだよ」

ハジメが神妙な面持ちで言葉をこぼした。

「う、裏口入学……？」

「ちげえ！ 推薦もらったんじゃない！ 大したとこじゃないけどな」

「おめでとうございます！」

話していると、廊下から何やら笑い声が聞こえてきた。足音が部屋に向かってくる。ドアが開いた。

「……あ、れ……？」

ケイ君と瀧野先輩だった。オレ達がどんな表情をしていたか分からないが、瀧野先輩はりんごくらいに顔を赤くさせていた。

「な、ななななんでもでで？」

「た、瀧野先輩こそな」

「きゃあああああ！」

瀧野先輩が奇声をあげながら走り去っていった。残されたケイ君は、ただただ伸ばした手の行き場を失っていた。

「ケイ君！」

ハジメがにやにや笑いながら、

「ねえねえ、何で瀧野先輩と一緒にだったの？ 付き合ってるの？」

いつから？ 何がきっかけ？」

「そつ、そんなのじゃないよ！」

あからさまに赤面するケイ君。凶星？

「ぼくが自主練してたら一緒に打ってくれて……それより、この人は？」

タケシ先輩がケイ君の方を見た。

「ぬわっ！」

「ひいっ！」

「タケシ先輩、からかわないでくださいよー」

「わりいわりい、なんかいじりたくなる顔してたから」

初対面の人間までもそう思ってしまうのか。

「この人は霧島剛先輩。ほら、人数足りなかったところを先輩一人が入ってくれたって言ったじゃん？ その人」

「ああ！ その節はありがとうござい」

「ぬわっ！」

「ひいっ！」

「だから先輩……」

「はっはっはっ、こいつはからかい甲斐があるな」
タケシ先輩が豪快に笑った。

「とりあえず練習しようぜー」

「ユウヤ君は、もう大丈夫なの？」

ケイ君がおどおどしながらそう訊いてきた。

「あー、もう大丈夫……かな」

「あまり無理しないでね」

「こいつら、優しすぎるんだよ。」

「あ、ちよつと電話するね、します」

携帯片手に廊下へ出て行った。ハジメがそろそろドアの前に立ち、聞き耳をたてた。

「おいハジメ、やめてやれよ」

「しーっ、静かに」

「ほら、お前もこっち来い」

タケシ先輩までそんなまねして……。

「……あ、もしもし……はい……瀧野先輩も一緒に……はい……

……はい……分かりました……え？……はい！……ぜひ……じゃあ

今度……また連絡します……はい、またー」

電話を切ったらしい、ドアに向かってくる。

「離れろっ」

タケシ先輩が小声で指示した。

「戻りましたー」

ケイ君がドアを開けた。

「ほらケイ君、ぼさつとしてないで準備準備！」

ケイ君が戻るや否や、ハジメが急かす。

「そうだ、さつさと着替えるんだ！ さあ早くっ」

「あ、はい！先輩すみません！」

盗み聞きした事実をひた隠すために練習を始めるハジメとタケシ先輩。この二人、なぜか息がぴったりだ。

「つぶはあ、あつがなついぜえ！」

「タケシ先輩下らないっすよー」

「へっへっ、ラムネはビン入りに限るぜ」

空一面茜色に染まる。コンビ二の前で、オレとタケシ先輩二人はたむろっていた。

「また来週も練習来てくれるんですよね？」

「おう、俺も一会員だからな。お前こそ練習出るのか？ 最近さばってたんだろ？」

「……情報がはやいですね」

「ちよつと耳にした。お前、この前の大会で倒れたんだって？」

「別に体調崩してとかじゃなかったんですけどね……」

「……なにあつたよ？」

タケシ先輩は体もだが、器がオレとは比べられないほどでかい。頼つても、この人ならしつかりと支えてくれる。そういう人だったな。

「……ちよつとつてとこです」

歯を見せながら能天気になつてみせた。

「お前は相変わらずだなー」

「そんなことないですよ？」

「おお？ 毛でも生えたか？」

「そんなもんとつくです。あと……」

ペットボトルを口に運び、中身を飲み干した。

「次は勝ちますよ、大会」

その23（後書き）

もつそろそろ物語りも終盤なのじゃ。

その24

どしゃぶりだ。アスファルトの上に波が行き来し、排水溝に吸い込まれていく。頭上で開く透明傘を見上げた。無数の雨粒が傘の表面にぶつかっては砕け、色を持たない水滴がいくつも消滅していく。空は雨雲で覆われ、太陽の光が遮られている。朝だというのにやけに暗い。音が全身を包む。自分自身が鳴り止まない雨音と同化し、消えていくかのようだった。

「ユウヤ、中入るぞー」

降りしきる雨の中、ハジメに大声で呼ばれた。

雨で視界が悪いが、一目で思い出せる。ここは、夢で見た体育館。忘れようとしてた、あの場所だ。

陣取った席に鞆を置き、会場を見下ろす。しばらく目が離せなかった。

開会式が終わり、ジャケットを羽織る。会場では全ての台で試合が始まっていた。

「暇だなー」

ハジメが隣で同意を求めるように愚痴た。

「しょうがないよ、今日の大会は団体戦六人いないと出れないんだから」

ケイ君が説き伏せた。

「分かっただけどー」

「みどりちゃん、今何時ー？」

座りながら三神先生にそう言うタケシ先輩。

「みどりちゃん？」

オレ達一年が同時に疑問符を浮かべた。

「霧島、下の名前で呼ぶなっつーの」

「いいじゃん、今更直せないしー」

「……先輩、三神先生知ってたんですね」

「おう、みどりちゃんの授業受けてるんだよ」

「寝てるのを叩き起こされてますの間違いだろ？」

威嚇するかのような三神先生の視線に、タケシ先輩は笑って返した。

「女子の試合始まりますよ」

オレがそう言うと、タケシ先輩もフロアを見下ろした。

「お、アヤも出るみたいだな」

オレ達から見てすぐ前で、女卓が台につこうとしていた。

卓球が好きだった。

いや、好きだったかですら、今となっては曖昧に思えてきた。思いはいつだって美化されている。あの頃の感情だって、振り返ればそうだったかもしれないという推測程度に過ぎない。

ならなぜまだ引きずっているのだろう。周りの目を気にしているのもあるけど、それが一番ではない。逃げたくない、負けたくない何かするわけでなくとも、どこかで逆らおうとする反骨的な感情を抱えているように思える。

「アヤちゃん、あなた一軍の一番手ね」

意味が分からなかった。部長に聞き返した。

「私ですか？」

「そうよ」

真っ直ぐな瞳で見つめられた。

「……分かりました」

一年の私は団体戦では二軍の予定のはずだった。突然の変更。困惑して、その場に立ち尽くしてしまった。

「……ほら、フロア行くよ」

後ろから声をかけられた。部長の声じゃない、他の先輩が私に声

をかえ、階段を下りていった。

だって、私のこと嫌いなんじゃない……？

「みんな、アヤちゃんが頑張ってるのを見てたのよ」

部長が私の肩に手を添えて、そう言ってくれた。

ここにいてもいいんですか？

みんなと一緒に卓球しても、いいんですか？

「おい、置いてくよー？」

先輩達が呼んでくれた。

「行こ、アヤちゃん」

「……はいつ」

ここが、私の居場所なんだ。

「やっと俺達の出番か」

「ですね」

午前の団体戦が終わり、午後の個人戦が始まろうとしていた。

「よし、したら円陣組むか！」

「良いですね！」

三神先生含め全員その場に集まり、輪の中心で手を重ねた。

「よっしゃ、やるからには勝ってこい！ 負けんじゃねえぞ！
り倒せえ！」

殴

「殴っちゃダメでしょ先生……」

タケシ先輩が息を吸い込んだ。

「ピンポン同好会」

「……ファイツ、オー！」「」

円陣を解いて、タケシ先輩が何か思い出すようにつぶやいた。

「あ、さっき小便した時に手洗い忘れてた」

「」「きたなっ！」「」

その24（後書き）

じやがりこスパイシーチキン味食べてきた。おいしかったけど、やっぱりサラダ味に限る。

その25

「あんま緊張すんなよー」

「うん、行ってくる！」

ラケットを持って、ケイ君が席を立った。

「ケイ君、がんばってねー！」

「ケイ君ケイくん！」

隣の女卓の先輩達もケイ君に声をかけてきた。律儀に返事するケイ君。そこにちょうど瀧野先輩がフロアから上がってきた。ケイ君と瀧野先輩がすれ違い際に顔を合わせた。

「ケイ君、がんばってね」

「えへへ、行ってきます」

その場にいた全員が二人を凝視した。視線に気づく瀧野先輩。

「え、ちよつと、なに？」

瀧野先輩が視線にたじろいだ。

「今、部長がケイ君って……。前まで牧野君って呼び方だったのに

……」

「ええ？ 部長、ケイ君とどういう関係？」

「ケイ君になにしたんですか？」

「何もしてないわよ！」

瀧野先輩がケイ君の方を見た。見つめられ、ケイ君はにっこりと微笑んだ。

「ちよつと、なにその二人は分かち合えてるみたいなの？」

「部長いやらしいっ！ こんな純粋な子に！」

「こら、変なこと言わない！」

「えと、試合いってきます！」

ケイ君がフロアへ駆けた。残された瀧野先輩を、女卓の面子がいやにやと見つめていた。

ケイ君の試合が始まった。

ケイ君が下回転サーブを打つ。相手はツツキすると、即座に後ろに下がった。ケイ君もツツキで返す。相手は次に、腕を上から下に大きく振り落とした。カットマンだ！ 球はゆるやかな速度で、だがネットぎりぎりの高さでケイ君の元へ。球はあまり跳ねず、ケイ君はツツキしたがネットに引っかけたてしまった。

初戦からカットマンを相手にするなんて……。

カットマンは、相手が打つ球に下回転をかけて返し、相手がミスするまで粘るか、相手からのチャンスボールをスマッシュやドライブで決める、かなり高度なプレイスタイルだ。独特な戦い方ゆえにプレイヤーはさほど多くはないが、苦手な選手にとってはまさに沼に引き込まれるような試合になる。

相手は相当手馴れているように見える。カットマン特有の、腕の振り落としがなめらかできれいだ。

カットされた球をケイ君がツツキで返したが、回転を見誤ったのだろう、台上に高く浮いてしまった。問答無用のスマッシュが打たれる。台から下がり、球を追いかけるケイ君。だがラケットは届かず、その場に転んでしまった。

カットマンに翻弄され続けている。球の回転、軌道によって、弄ばれるだけのゲーム進行。だが変化は、唐突に起こった。

ケイ君が腕を下から上に勢い良く振り上げた。まくるような大振りで球をこすり上げる。球はゆつくりと弧を描きながら台の奥に入り、回転数を損なわないまま高くバウンドした。ルーブドライブだ……！ カットマンは台から大きく遠ざかり、後方から今までよりも少し高い位置で軽くカットした。弱い下回転で、しかも球の位置は高い。ケイ君がラケットを高々と上げた。

渾身のスマッシュ！

カットマンが床すれすれでさばいた。だが甘い、もうすでにケイ君は次に備えてラケットを振りかざしている。スマッシュ、スマッシュ、スマッシュ。何度もカットマンが拾うが、そのたびにケイ君がスマッシュで返す。規則正しい、はじけるようなラリー。両者手

を止めない、引かない、諦めない。

ケイ君がスマッシュではなく、ラケットの面を上に向け、ツツキの構えをした。カットマンが急ぎ足で台に詰め寄る。球の高度がみるみる下がるが、ケイ君は打とうとしない。十分に落ちたところを見計らい、ケイ君がラケットを引き寄せた。下から顔前に向かって振り上げる。カットマンが足を止めて後退しようとするも遅かった。ケイ君のドライブショットが台の奥底にねじ込まれ、バウンドした球が床に転がっていった。

ケイ君は放心したように、数秒間その場から動かなかった。

フロアから階段を上り、荷物を置いた席に戻ると、ケイ君と三神先生が待っていた。

「ユウヤ君、一回戦突破だね！」

「ああ、オレの相手は雑魚だったからな。それよりケイ君こそすごいよ！ 良く勝てたね」

「ありがとー！」

無垢な笑顔でそう答えてきた。

「まさかカットマン相手に心理戦で上いくとはね。本当に上手くなつた」

「そんなに褒めないでよー」

階段を上る足音が聞こえた。

「ユウヤ、ケイ君、なんでおれ勝てないのかなあ？」

半べそかきながら質問するハジメ。

「才能ないんじゃない？」

「ユウヤつめたっ！」

本当のことを言えば、实力はそれなりについてるはず。あとは相手との駆け引きさえできるようになればってところか。

「こ、今度の休日一緒に練習しよ！ 練習すれば強くなるよー！」

席でうなだれてたハジメが、ケイ君に向かって顔を上げた。

「えー？ だってケイ君、最近毎週末瀧野先輩と練習して、その

あとは決まって二人っきりで買い物したりご飯食べたりしてるんでしょ？ 時間割いてもらうなんて悪いよー」

「ど、どうしてそれを知ってるの？」

「おれの情報収集力はケイ君も知ってるはずだろ？」

ハジメの目から鋭い光を一瞬感じた。

「……はあゝ」

相当シヨックだったのだろう、ため息なんて珍しい。

「ハジメ」

三神先生が声をかけた。

「……はい？」

「しかたないさ、お前には所詮無理だったんだよ！」

「先生のばかあっ！」

その25（後書き）

自分はカットマン苦手です。だっておれ脳筋だし。

その26

三回戦まで勝ち進んだ。そして四回戦目の対戦相手が誰なのかも、すでに分かっていた。

台をはさんで、ハルと向き合った。

ハルともう一度打つため。そのための今日。もしかしたらぶつからずに終わるかもしれない。だがどうして、この時を信じて止まなかった。これはオレの単なる自己満足なのかもしれない。ただ他に解決策が見つからない、これしか思いつかない。

いくら目を背けても、本当の意味で逃げることもなんてできやしないんだ。目の前のハルがそう証明している。

「ラブオール」

横回転をかけながら台の奥にサーブを打つ。フリックを打たせないよう、なるべく深い位置へ。ハルは球を無理矢理ねじ伏せてドライブショットを打ってきた。しょっぱな違う回転をかけくる、ハルらしい。バックハンドでブロック（ドライブの回転量に合わせてラケットの角度を変え、押すように打つ守備的な打法）する。ハルは容赦なくオレのバックに集中して攻めてくる。

忘れられない、中学二年。冬の大会。この体育館。先輩達がいなくなり、いよいよオレ達の部は落ちるところまで落ちていた。元々やる気のなかった二年生は、耳障りな先輩がいなくなったと言わんばかりに墮落し、そんな先輩に戸惑う一年生も部から遠のいていた。大会は形式上出るだけ。さっさと負けた方がらくという無気力さ。我慢の限界だった。

今度はサーブをかけられるだけ下に回転をかけ、台の浅くも深くもない中間、ハルの体中央に重なるように返す。ドライブもフリックもまともに受けていられない、限界までバックสปินをかけ、ツ

ツツキ戦に持ち込もうとする。ハルはそれを見抜いてか、即座に体勢を低くし、思い切り体を持ち上げるようにルーブドライブを打ってきた。上回転のかかった球が山なりに返ってくる。狙いどおりにいかねえ、こつちもフォアハンドで打ち込む。力まかせな打ち合いの連続。ハルは打つタイミングがわずかに早い、一見五分五分な打ち合いに見えるが、ペースを握っているのはハルだ。流れを変えられずにネットに引っかかり失点。

団体戦で負けたというのにへらへら笑ってやがった。誰一人悔しがる奴はいなくて、気が付いたらその内の一人の胸倉をつかんだ。一触即発の中で、ハルが仲裁に入ろうとした。こいつはバカみたいに人が良いから、対戦相手だったオレ達の内輪もめにまで首突っ込もうとしたんだ。どこまでお人よしなんだ。

球が大きく浮いた。その先ではハルがラケットを高く構えている。落ち着け、ハルのラケットを、動作を一瞬でも見逃すな。ラケットの芯に当たる甲高い音と共にスマッシュが放たれる。球が来るであろう場所に向かって、ラケットの面を突き出した。スマッシュの速度そのまま球をハルの台目掛けてはじき返す。

卓球台がぶつかって揺れる音と、大げさなほど鈍い音が響いて、全員の視線が音のした方向に集まった。感触が手に残っていた。

そんなつもりなかった。ましてや憎くもない相手を、自分のことを理解してくれる数少ない友達を。ハルが急いで医務室に連れて行かれた。ハルを傷つけてしまった。

その場では何も異常がないと言い渡された。そのあとの試合は自粛したものの、ハル自身いつもどおりだった。傷つけたオレを慰めてくれる、普段と変わらないハルだった、その時まででは。

後日、ハルの家に行った。大勢の人が集まっており、みんな黒い服を着ていた。玄関から棺桶が運ばれ、黒の車体に金色の造形があ

しらわれた霊柩車に積まれようとしていた。

「突然だったらしいな」

「親より先に死ぬなんて」

「そんな……ばかな……だって、いつもどおりだったじゃんかよ……」

頭の中が真っ白になり、いつの間にかオレは、逃げるように駆け出していた。

台の浅い位置でバウンドした球に向かってハルが腕を伸ばし、フリックで攻めてきた。もう一度ライジングで返す。ハルの球速を逆手に取り、ハル自身返しづらくさせる。案の定、体勢が崩れた状態で打ち返してきた。高く浮いた球が近寄ってくる。

ハルの台目掛けて、球を叩き付けた。手を伸ばすハル。だが、球はラケットの横すれすれを通り抜けて行った。

「ゲームセット」

審判のコールをよそに、オレは台に突っ伏していた。目頭が熱い。ハルのことが大好きだった。罪悪感に駆られていた。一度逃げ出したらもう取り返しがなくなっていた。

許してほしい。我がままなのは分かってる。だけどあの頃のように話したい、一緒に卓球がしたい。もう一度、友達になってほしい。泣きながら、何度もハルにごめんと言った。腹の奥底に抱えてたものを全て吐き出してしまいたかった。

雨音と泣き声とピンポン球の打球音。潤んだ瞳で、ハルの顔がぼやけて見えた。

その26（後書き）

次回最終回です。

その27（終）

「はあ？ お前死んでなかったのかよ？」

ハルが人差し指をたてて小さく「シーツ」と言った。

「電車の中で大声出しちゃダメでしょ？」

周りの視線がオレに集まっていた。

「……いや、だってオレ、お前ん家から棺桶出てくるの見たぞ？」

「棺桶？」

「一昨年の冬！ 前もって連絡とつてて、家行ったら喪服着てる人だからできてて、親より先に死んだとか……」

考え込んでからしばらくして、

「ああ、それもしかして、おじいちゃんのことじゃない？」

「……は？」

「ちょうどその頃におじいちゃん亡くなったんだよ」

「親より先につて！」

「ひいじいちゃんひいばあちゃんはまだ元気なんだー」

にこやかに答えてきた。

「連絡したの？ 聞いてないけど」

「ハルがいなかったから伝言頼んだんだ。会えないようならハルの方からかけ直すようにして下さいって」

「……誰に伝言頼んだの？」

「ええと……」

記憶をたどる。

「……しわがれた声の、お年寄りらしき人だった……」

「じゃあさ、何で死んだ僕が試合に出てると思ったの？」

「……霊に化けたのかと」

「あはは！ ユウヤって前からそっかしいよね」

「……オレは、ずっとこんな勘違いに悩まされてきたのか？ バカか？ バカなのかオレは？」

「うん、バカだねー」

今まで誤解してた分のイライラ含めてむかついたので、ハルのほつぺをつねって八つ当たりした。

電車とバスを乗り継ぎ、夏の大会が開かれた体育館に着いた。今日は卓球場が一般開放されている。オレとハルに向かってハジメが手を振った。みんな揃ってるようだ。

「おせえよユウヤ！ それと宇都宮君だっけ？」

「ハルでいいよー」

「わりい。あれ、ケイ君は？」

自分の背後に向かって親指を立てるハジメ。女子の先輩達が集まっていた。

「ケイ君、今日は私と練習しようね？」

「あ、はい」

「あ、じゃあその次あたしー！」

ケイ君に群がる先輩達。おもむろに瀧野先輩が女子の輪を突き破り、ケイ君を引きずり出した。見せ付けるようにケイ君を抱きしめる瀧野先輩。

「部長ずるいつ！」

「離れろー！」

「ダメよ、この子は私のなんだから」

「先輩、く、苦しいですっ」

もう隠す気ゼロだな。

「アヤさん、おれと打って下さい！」

おお、ハジメが積極的に行動してる。

「うん。ええと、ハマジ君だっけ？」

まだアヤに名前覚えられてないのか、哀れな奴。

「おいてめえ、アヤに少しでもおかしいことしたらぶん殴るからな」

「タ、タケシ先輩ももういらしてたんですか？ あ、この前の大会すごかったですね、三位なんてなかなか取れないですよ！」

「はっはっはっ、ちよろいもんだぜ」

「ダメだよお兄ちゃん。二年生に負けたなんて、年上の威厳ないよ」

「アヤア、ずいぶん辛口に育ったんだなあ！」

「よし、久しぶりに打つかー！」

「中嶋じゃん、お前も練習すんの？」

「あ、おれがなかちん呼んどいたー」

「ちよつと中嶋君、今日は私とデートじゃなかったの？」

「ああっ、みさ子ちゃんごめん、忘れてた！ てか、なんでここが分かったの？」

「あなたの携帯電話に発信機を付けといたわ！ これでどこにいても丸分かりなんだからね！」

「こええええ！」

「おいハジメ、どうすんだよこいつら？」

「まあ、いいんじゃない？ 初心者同士で打たせてりや……」

「お前ら全員揃ったかー？」

「あれ、三神先生いたんですか？」

「大人数で練習って聞いてな、念のため顧問同伴だ」

「先生、いつもどおり暇なんですな」

「誰が暇だハジメてめえ！ 悪かったな、旦那どころか彼氏もいないどフリーで！」

「先生ごめんなひゃい！ 口が破けます、いひゃい！」

「あははっ、ユウヤと同じくらい面白い人ばかりだねー！」

「あーもうつつせえ！ さっさと打つぞ！」

その27（終）（後書き）

ここまで読んでくださった方がいましたら、本当にありがとうございます。
感想など頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251v/>

たっポン！

2011年8月30日03時28分発行